

---

LIFE AFTER DEATH ~ 死後の人生 ~

小野 大介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

L I F E   A F T E R   D E A T H    ↳ 死後の人生

### 【Nコード】

N 2 6 8 6 Z

### 【作者名】

小野 大介

### 【あらすじ】

三十路を目前にし、立花 麗子はリストラで会社を辞めた。大学時代からの恋人には浮気を告白され、しかも妊娠を理由に別れを告げられる。

絶望し、自殺まで考えた麗子だが、なんとか思い留まる。しかし、そんな彼女に降りかかる不幸。その結果、滑って転んで頭を打ち、あっけなくも死んでしまった……。

屍と化した麗子の元に歩み寄る黒い影。それは言った。

「もしもし、聞こえますか？ もしもーし！」

それは幼い姿をした死神だった。名は命。幽霊となつて目覚めた麗子に彼は言った。

「立花 麗子さん、死神という仕事に興味ありませんか？」  
スカウトされてしまった……。

(1)

とあるマンションの一室。

玄関すぐ横の洗面所から、シャワーの音が絶え間なく聞こえてくる。

曇りガラスの扉の向こう　湯気が充満したバスルーム。

バスタブに、一人の女性が全裸の状態で横たわり、熱めに設定されたシャワーを頭から浴びている。

控えめに染められたダークブラウンの髪が濡れて、肩から胸元にかけてペタリと張りついている。

華奢な身体を伝い流れる湯。栓が抜かれているのでバスタブ内にたまらず、小さな渦を描いて排水溝に流れ込んでいる。

彼女は、その渦を、虚ろな目で見つめている。

微動だにしない瞳。……けれど、ふいに動き、あるものを見つめた。

それは、自らの右手が握りしめている一本のカミソリ。

非常に薄い刃が取り付けられているそれは、化粧用のカミソリだ。彼女はおもむろに右手を動かし、カミソリを、太ももの上に置いた左手に運んだ。

見るからに鋭利なその刃を返し、手首に近づける。

近づける……近づける……。

目は虚ろなまま。その表情には、感情が見られない。自らの皮膚に刃を押し当てようとしているのに、不安も、恐怖もなく、まるで生きる屍である。

しかし、

プルルルルッ！　プルルルルッ！

突然、曇りガラスの向こうから機械的な音が聞こえてきたかと思

えば、虚ろなその目に光が宿った。とたん、彼女はハツとし、びくりと肩を揺らした。

「つうつ!?!」

直後に声を漏らし、その身と顔を強張らせた。

動いた拍子に切ってしまったのだ、左手首を。見れば、小さな傷が斜めに走っている。わずかに開いた皮膚の間から、赤いものがじんわりとあふれ出した。

血を認識した瞬間、ズキンツ、と痛みが走った。それが彼女に感情を与えた。

怒り。

「クソバカッ!」

目を見開き、両眉を吊り上げたかと思えば、感情のおもむくままに声を荒げて、右手を振り上げ、カミソリを投げた。備え付けの鏡に小さな傷を残し、床に落ちた。

左手首をすぐに口元へと運び、傷をなめ、血を吸う。

あふれ出し、筋状に流れていた血液だが、彼女が身体を起こした際に当たったシャワーですぐに洗い落とされた。

左手首を口元へ押しつけたままバスタブを出ると、右手を伸ばしてシャワーを止めた。床にあるカミソリには見向きもせず、すぐにバスルームを後にした。

洗面所、また右手を伸ばして純白のバスローブをひったくり、素早く羽織った。

まだ出血しており、触れた袖口が赤く染まった。

濡れた髪をそのままに、足早に洗面所を後にする。玄関から続く廊下を奥に進み、その先にあるリビングを指す。

プルルルルッ！ プルルルルッ！

その間も、例の音は鳴り続けている。彼女はその音をたどるように、奥の棚へ移動した。その上には電話機がある。

赤くにじんだ袖ごと左手首を、凹凸の乏しい胸に押し当てつつ、苛立たしそうに受話器を取ろうとする。だが、髪がぐっしょりと濡れているのを思い出し、代わりにスピーカーホンのボタンを押した。点灯したのを確認し、話しかける。

「もしもし、立花ですが」

「麗子！ やつと出た！」

女性のものと思われる大声に遮られた。思わず目を細めてしまう音量だ。

「ちよつとアンタツ！ 携帯、マナーモードにしてるでしょ！？」

何回かけても出ないんだから！ まったく、なんの意味の携帯よ！」

口調だけでも不機嫌だとわかる。

「なんだ、絵里か……」

電話の相手は知り合いのようだ。それがわかると、彼女は一息ついた。

「なんだとはなによお、私じゃあ不満？」

「いや、別に不満ってわけじゃないけど……」

「けどってなによお、けどって。含みのある言い方ね」

「ああもつ、めんどくさいなあ……で、なによ？ なんか用なの？」

「用があるから電話してるんじゃないの！ ……麗子、アンタ、会

社辞めたって本当？」

相手の声に若干の重みが増した。

「……ええ、本当よ」

彼女は、一拍間を置いて答えた。

「なんで!？」

「な、なんでって……一身上の都合によりってやつよ」彼女は苦笑を交えて答えた。

「……怒るわよ？」

静かな怒り。

「わ、わかったわよ！ ほら、うちの实家って農家じゃない。私、けっこう遅くに生まれたしさあ、それに一人っ子だし。両親ももう

年で辛いみたいだから、面倒見てあげなきゃいけないって思ったわけよ。だから！」

人は嘘を吐くとき、無意識に右斜め上を見上げてしまうというのが、彼女は、今、まさにそうしながら答えている。

『……本当にいい？』

声だけでも疑っていると思われる。

「本当もなにも、嘘つく意味ないし……」

『……ハア。いいわよ、そういうことしておいてあげるわよ。言いたくないんでしょ？ だったら、無理には聞かない。言いたくなったら言いなさいな。愚痴ぐらいはいくらでも聞いてあげるから。独りで抱え込んだじゃダメよ』

「うん……あんがと……」

彼女は俯いて、消え入るような声を漏らした。

『ちよつと、なんて声出してんのよ、アンタらしくない……！ あーもう、話題変えよ！ えーつと……あつ、そう！ あれ！ 彼氏とはどうなのよ？ このところ仕事が忙しくて会えてないって言うけれど、あれからどうなのさ？』

「真……？ 真とは昨日会ったよ。いつものカフェでお茶した」  
彼女は微笑みを浮かべた。

『あら！ あらあらあら！ そう、良かったじゃん！ ……で？ 会社辞めたこと、もう言ったの？』

「あー……いや、ううん、それはまだ……」

『そう……早い方がいいわよ。言いくいかもしれないけどさあ』  
「うん、そうだよねえ……」

『あつ、そうだ。そのときに、ついでにプロポーズしちゃったら？ 会社辞めたついでに家庭に入っちゃうのもいいんじゃない？ 今なら寿退社みたいなもんだし』

「アハハ、それもいいかもね」

『待っていてもダメよ、今の男は草食なんだから。それに、今は女からプロポーズをする時代なんだってよ』

「なるほど。考えてみようかな」  
そのとき、スピーカーの向こうから、ジャアーツ、と水の流れる音がした。

「ちよっ、アンタ、今どこにいんの……？」

『どこって、トイレに決まってんじやん。じやなきや、こんなに長い間、私用電話なんかかけられないわよ』

「汚いなあ……」

『清潔ですう！ あ、ところでさあ、もうすぐ定時だけど、今日飲みにいかん？』

「えっ、今日……？」

『大丈夫よ、聞かないから。気晴らしに飲んで騒ぐだけ。いつものところこうよあ、美味しいのどぐろ出すところ！ その後、ちよっと前に見つけたニューハーフの店に行つてさあ、オツパイ、揉んじやおうぜえ！』

嬉々とした声。

「セクハラ親父か、アンタは……」

彼女は呆れた顔をした。

『ねえ、行こうよあ。一緒に二日酔いになって苦しもうぜ！』

『どんな誘い文句よ……うん、わかった。いいよ、行く』

『よっしゃ！ じゃあ、居酒屋で待ち合わせね。後に着いた方が、ボトル新しいの開けるのよ』

「え、それって、私の方が有利じゃない？」

『だから、おごつてやるって言つてんのよ。察しなさい。あ、でも、ボトルだけよ』

「わかつてるわよ」

『ハハハッ。じゃあね』

「うん、じゃあ……」

『ブツン。ツー、ツー、ツー……』

スピーカーから電子音しか聞こえなくなると、右手を伸ばし、一度受話器を取つてすぐに戻した。……音が途絶えた。



とたん、棚に手をつき、寄りかかった。前かがみになり、大きなため息を吐き出した。

「……いつそ愚痴っちゃった方が楽だったかなあ……」  
彼女はぼつりと呟いた。胸に押し当てていた左手を離し、見る。赤黒く染まり、汚れた手首。それなりに出血したようだ。すでに血は止まり、固まった血で傷口もふさがっている。

それらを見つめ、彼女はホツとした。……だが、一転。安堵していた目が凄みを増し、再び怒りに満ちた。

「なにを考えているんだ！ 私は！」

声を荒げると、同時に右手を振り上げて、目の前の壁を拳で一撃した。

「バカ過ぎる……意味がわからない！ こんなこと、するなんて……！」

憤慨している。

荒々しく自分を貶したかと思えば、また一転。今にも泣き出し、しまいそうな顔をし、壁を叩いていた右手で後ろ髪をぎゅっと握り締めた。

絞り出された水滴がフローリングに散乱した。

「……………出かける用意しなきゃ」

長い沈黙の後、バスローブの長い裾で落ちた水滴を拭いっつ、きびすを返した。

来た道を引き返す。その際、道中に落ちていた水滴も拭った。

「これ、さすがに無理かなあ……」

洗濯機の前でバスローブを脱いだ。右手で掴み、放り込もうとするが、ふと思いつく。赤く染まった胸元を見つめ、残念そうな声を漏らした。

洗濯機に入れるのをやめて、横にあるゴミ箱に突っ込んだ。

開けっ放しにしてあった扉をくぐり、再びバスルームへ。落ちていたカミソリを拾い上げると、バスローブを突っ込んだゴミ箱に投げやった。

扉が閉められてまもなく、シャワーの音が聞こえてきた。  
「いったあつ！ しみるう〜……！」  
そして、声も……。

(1) (後書き)

いかかでしたか？ 楽しんで頂けましたら、幸いです。

様々な方のご意見をうかがいたいので、評価や感想を頂けましたら助かります。あと、とっても嬉しいです。

(2)

昨日。

前夜、めずらしく深酒しなかったので目覚めがよかった。遅刻の恐れがある時間に起きずに済み、顔がむくまなかった。化粧のノリもよかった。余裕があったので、朝のニュースの占いを見届けてから家を出られた。運勢が悪かったのが残念なところだ。

今日は晴天。空は高く、澄んでおり、清々しい朝。

信号に一度も引つかからず、駅に着けた。ちょうどホームに電車が入ってきたのでスムーズに乗り込めた。

ラッシュはともかくとして、会社までの道中、気分が滅入るようなことは起きなかった。ガムを踏まず、段差に躓かず、ヒールも折れなかった。

久しぶりにいい出勤だった。今日はきつといいことがある、そう思える朝だった。

「おはようございまーす！」

立花 麗子は、扉をくぐると、すぐに元気よく挨拶をした。先に出勤し、すでに各々のデスクにいた数人の男女が振り返り、挨拶を返してくれた。

タイムカードを押し、自分のデスクに移動する。カバンを置き、椅子を引いて腰を下ろしたところ、「立花さん」と誰かに名前を呼ばれた。麗子はすぐに顔を上げた。声から、それが誰であるかはすでに察しており、彼女は迷わず右を向いた。

窓のそばに一台、他とは距離を離して置かれているデスク。その席に座っているのは、全体的に細く、ひよろつとした、どこことなしかくたびれた顔をした男。頭に白髪が目立つ。

「課長、なんですか？」

麗子はその、よく言えば物腰が柔らかい 悪く言えば頼りない

男を課長と呼んだ。

「ちよつと話があるんだけど……今、いいかな？」

「はい、大丈夫ですが」

麗子は席を立ち、課長の元に移動した。すると、彼も席を立ち、別の方向へ歩き出す。

「奥で話をしようか」

課長は、進行方向の奥、壁とガラスで仕切られた応接間を指差した。麗子は頷き、言われるままについていった。そんな二人の姿を、同僚たちは、訝しげにチラチラうかがう。

課長が扉を開けて待っている。麗子がぐくぐくと、彼はすぐに閉め、向かい合う形で置かれているソファアの一方に手を差し伸べた。彼女が席に着くのを待たずして、外から見えないよう、すべてのブラインドを下ろし、その場を密室にした。

一連の動作を横目にうかがいつつ、腰を据えた麗子は、（話ってなんだろう……？）と表情は変えず、心の中で勤ぐっていた。

（仕事や人間関係でトラブルを起こした覚えは無いしなあ……自分と言うのもなんだけど、勤務態度は真面目な方だし、挨拶もちゃんとしているし、セクハラとか、性的問題は嬉しいような悲しいような、今までに一度もなかった……あ、お見合いとか？ 前に一度あったっけ……）

麗子があればこれ想像しているとき、課長は、テーブルを挟んだ向こうのソファアに腰を下ろして向かい合わせになった。自然と意識が彼に向く。そのとき、テーブルの上にこれ見よがしに置かれてある大きな茶封筒に気づいた。

課長は、あらかじめ置かれてあったその茶封筒に手を伸ばし、ひもを解いて開けようとする。……が、ふいにその手を止めてしまった。

「……？」

どうしたのだろうかと思ひ、眉をしかめる麗子。課長はしばらく動かなかった。

ようやく動いたと思えば、手にしていた茶封筒を隣の席にやっ  
てしまった。

「立花さん、あのね、そのお……」

少し前かがみになり、両肘を両膝の上に乗せて、祈るとき  
のよう  
に指を組み合わせた。両手を口元に押しつけて、ボソボソ  
呟く。

「僕はね、立花さんのことを人として好きだからね……あつ、人  
だよ、人！ 人として。だからさあ、こんなときはちゃんと  
言わな  
ければいけないと思うんだよね。包み隠さずに。うちの会社、この  
ころ業績悪いでしょう。節約とか節電とか、かなりうるさく  
してい  
たから知っていると思うんだけどさあ、けっこうキツイ  
みたいでね。ついにやり出したんだよね、人員削減……。よ  
うはリス  
トラなんだけどね。それでさあ、今、早期優遇退職とい  
うのを募っているところなんだよねえ……」

課長の悪い癖である遠回しな言葉に軽く苛立ちを覚えて  
いた麗子  
だが、“リストラ”や“早期優遇退職”の言葉にドキツ  
とした。

(まさか……?)

思わず、手に力が入る。

「立花さんはどうかなあ？ 会社のために辞めてほしい  
んだけど……って、言われたとき、辞める？」

課長は上目遣いに、麗子の目をじっと見つめた。そんな  
彼の目  
だが、左右に揺れ動いている。いわゆる、泳いでいるとい  
う状態で、動揺しているのが見て取れる。

その目に見つめられて、麗子は思った。

(うわ、そつちかあ……)

手伝えと言われるのか、それとも辞めろと言われる  
のか、ど  
ちらかと勘ぐってはいたが、その答えは、より悪い後者  
だった。

「……課長、はつきりおっしゃって頂けませんか？」

麗子もまた少し前かがみになり、今まで以上に敬語を  
使い始  
めた。「あ、うん、ちょっと遠回しだったね、ゴメン……あ、いえ、申し  
訳ありませんでした。立花さん、任意退職に応じては頂  
けませ

んでしょうか？」

課長も敬語を使い始めた。一度、深くお辞儀をした後、求められたとおり、はっきりと自分の意思を伝えた。

自ら求めたこととはいえ、面と向かって会社を辞めてほしいと言われ、麗子は少し動揺してしまう。すでにわかっていたことだが、どうしても戸惑ってしまう。

(どうして私なんだろう……課長は、どうして私を選んだ……?)

麗子は思った。そして、考える。

課長との関係は決して悪くなかった。とはいえ、部下と上司という関係の話でだ。友人関係ではないし、ましてや、それ以上は皆無である。忘年会などで飲み交わすことはあっても、目上であり、年上でもある課長の前で限度を超えた羽目の外し方をした覚えはないし、不用意な失言も、覚えている限り一度もない。そういった礼節に関しては重んじていた。だから、人間としては嫌われていないはずだ。仕事においても、使い勝手のいい一人だったはず。使われていて、それはわかっていた。だからこそ、解せなかった。どうして自分を選んだのか。……だが、ちよつと考えてみれば簡単なことだった。

リストラ　正しくは整理解雇。その際選ばれやすい人間というのがある。

サバサバしていて、辞めることに執着心の薄いタイプ。

求められた際に文句を言えない小心者タイプ。

頼まれるとつい引き受けてしまう人のいいタイプ。

仕事ぶりや、給料の高い安いに関係なく、これらのタイプがまず選ばれる。とはいえ、会社にとって価値のある存在や、派遣は別だ。そもそも、派遣はそれ以前の問題である。

麗子は、どちらかといえばサバサバしているタイプだ。自分でもそれはわかっている。それに、彼女には特別秀でたところがなく、会社にとっての価値も低い。単なる正社員の一人に過ぎない。しかし、仕事ができないわけではない。特別できるわけでもないが、そ

れなりになんでもこなせてしまう。ともすれば、職を失ってもすぐに次を見つけられるだろう。と、思われてしまいがち。彼女は、そんなタイプなのだ。

麗子は自分を再確認し、納得した。鼻からため息を漏らし、ソファーに身体を沈めた。

「やっぱり嫌だよね……すぐには決められないよね……」

課長は背中を丸めて、猫背をひどくした。さらに前かがみになったことで、元々小さかったのがより小さくなった。

自分よりも細く小さく感じる課長の姿を見つめ、麗子は思う。

（人のよさが取り柄みたいなものなのに、こんな仕事、一番不向きじゃん……どうせ部長あたりにも押しつけられたんだろうけど……この人、断れないもんなあ……そもそも、そういう性格だし、立場的にもねえ……）

麗子が務める会社にも、当然労働組合はある。だが、社の労働組合は、管理職に就いている社員の加入を認めていない。つまり、課長には後ろ盾がなく、もっとも危うい立場にいると言っても過言ではないのだ。だから、率先して行わなければ、自分の身が危うい。面と向かって言われることはないだろうが、ようするに、クビを切られたくなければ生け贄を差し出せ。と、脅迫されているに等しい。

（かわいそうに……）

解雇勧告を受けているのは自分だというのに、麗子は今、課長に對して同情している。……しかし、ふとあることに気づいた。

（……待てよ、解雇勧告を受けた人間に同情されるんだから、課長ってある意味、適任者なんじゃ……？ 怒りや反感を抱かせず、かわいそうだと思わせる。これは狙ってできることじゃない……この仕事って、トラブルをなによりも嫌うはずよね。下手に怒らせて、労働組合を動かされたり、解雇強要だとかいちゃもんをつけられて、訴訟問題にまで発展したら面倒なことになるわけだし……そう考えると、課長って逸材……？ なーんて、なにを馬鹿なこと考え



てるんだか……)

課長にわからぬよう、そつと鼻で笑った。バレていないかチラリとうかがったのだが、あらためて課長の姿を目にしたことで、またあることに気づいた。

(あーあ、目にクマ作って……寝てないのかねえ……なんだかなあ、今にも自分が辞めるって言い出しそうな顔してる……どうしようかなあ……同情心で辞めるつもりなんか全然ないけど、こういうのつて断ると後がめんどくさいだろうしなあ……少なくとも目をつけられるわ。今のうちに辞めて、退職金を多めにもらった方が得かなあ……)

「あの、質問しても宜しいですか？」

麗子はふいに問いかけた。

「はっ、はい！ どうぞ」

課長はハツとして顔を上げた。許可するように手を差し伸べた。

「今、退職した場合、退職金とか、割り増しで頂けたりするんですよ？」

「はい、もちろんです！ 整理解雇ですからね」

課長はパツと笑顔を浮かべ、大きく頷いた。

「そうですね……」

(笑顔で答えてるし……。ハア、もういいかなあ……。会社にとつて、私はいらないうってことなわけだしねえ……)

少し悲しかった。少し切なかった。

「……フツ、わかりました。応じますよ、任意退職」

今度は聞こえるように鼻で笑うと、麗子は素っ気なく言った。

「えっ、本当かい！？ ……あ、いや、ごめんなさい」

課長は笑顔を強め、安堵の表情を浮かべた。だが、無意識とはいえ、顔に出るほど喜んでしまった自分に気づき、申し訳なく俯いてしまった。

「構いませんよ。辛い役回りを押しつけられましたね。書類とか、記入しなければいけないものってあたりするんですか？」

麗子は字を書くしぐさをした。

「あ、うん……あ、いえ、ございます。こちらで用意した退職願にお名前を記入して頂けますでしょうか？ ここです」

隣の席に置いてあった茶封筒から書類を取り出し、背広の胸ポケットに立てていたボールペンとともにテーブルに置き、差し出した。そして、空白の部分指し、丸く困った。

「目を通しても？」

麗子は書類を手に取り、すでに目を通していながら、形式的にたずねた。

「もちろんです」

課長が返事をし、頷いているが、麗子は見向きもせず、じつくり、すべての項目に目を通した。

「……………これが退職願なんですね。当然ですけど、初めて見ました」

ようやく視線を上げると、麗子は苦笑した。…………目は笑っていない。

「あ、そういうえば、今週末、給料日でしたね。ちなみに、給料はどのようになるでしょうか？ 次のが最後になるんですか？」

「そうですね、次が最後になります」

「そうですね……あつ、じゃあ、給料日過ぎてからにしようかな。一回分、給料が多めにもらえるじゃないですか」

ニヤリ。

麗子は不敵な笑みを浮かべた。

「え…………」

課長の顔が引き攣る。

「…………冗談ですよ。真に受けしないで下さい。切なくなりますから。そう言つと、麗子は本当に切ない顔をした。

「すみません…………」

課長は申し訳なさそうにした。

麗子は、書類をテーブルの上に戻しつつ、ボールペンに手を伸ば

した。ペン先を出して、紙面に近づける。先端を押しつけようとす  
るが、ペンを持つ右手が急に震え出し、動かせなくなってしまう。  
動揺しているのだろう。自らの身体が拒んでいるのだ。

自分の名前ほど書き慣れているものはないというのに、《立花  
麗子》という四文字を書き終えるまでにかなりの時間を要してしま  
った。書き終えると、どつと疲れてしまった。

まるで、自分の死刑執行のための書類にサインしているような気  
分だった……。

「ハア……。課長、いままでお世話になりました」

大きなため息の後、麗子は、自分の名前を記入した退職願と、ボ  
ールペンを差し出した。ついでに、首から下げていた社員証も。

課長は言葉なく、ただ深々とお辞儀するばかりだった。

「退職金ですが、いつ振り込まれますか？」

「ご要望がなければ、給料日に振り込まれます。ただちに振り込む  
ことも可能です」

「では、すぐでお願いします。気持ちに区切りをつけたいので。…  
金額が変わることはないですよね？」

「それはございません。ご安心下さい」課長はかぶりを振り、一度  
だけ頷いた。

「わかりました」

「他に、気になることはございますか？」

ボールペンを胸ポケットに戻し、退職願を茶封筒の中に仕舞いつ  
つ、課長はたずねた。茶封筒から離職票などの書類を取り出し、麗  
子の前に置いた。

「……任意退職ですが、私以外にも候補がいるんですか？」

麗子は少し考えて、たずねた。

「ええ、まあ……」

「よかつたら教えて頂けませんか？ もちろん、他言無用にします」  
「……わかりました。他言無用にお願いしますね。うちの課で

は、立花さんを含めた四人が予定されていました。後の三人は山田

さん。窪塚さん。木本さん……です」

課長は、ブラインドが閉め切られていて見えないはずの外を気にした。

「ああ……」

三人の名前を聞くと、麗子は大いに納得した。

それらは、うちの課でリストラされるとしたら　という想像の際に名前が上がる面々だった。例の、選ばれやすいタイプの者たちである。ただし、一人だけ例外がいた。山田である。とはいえ、選ばれて当然の人物ではある。

山田は女で、名前は沙織さおじと可愛らしいが、名前とは正反対に育つとはよく言ったもので、その顔も人柄も、可愛くはない。彼女はいわゆるお局様だ。仕事はできる人物なのだが、性格に少々……いや、かなり難がある。我が強く、ブライイドも高く、敵を作りやすい。世渡りは下手と言える。麗子とも何度か衝突したことがあった。かといって、関係が悪いわけではない。だが、仕事以外の付き合いは一切なくて、仕事以外の会話もしないというだけだ。

そんな山田を、会社は疎ましく思っていた。麗子が知っているほどにだ。だが、彼女の性格上、下手なことをすれば厄介なことになるのは目に見えている。だからこそ、未だに働いている。が、今回、それをわかっていながら候補の一人に選んだということは、全面戦争を覚悟で切り捨てたいということなのだろう。

（誰か、怒らせてはいけない奴でも怒らせたかな？　もしくは、それほどまでに逼迫ひっかくしているか……山田さんも、わざわざ敵を作つてどうするのかと思つてたけど、ついに来るところまで来たわけね……でもなあ、あの人、なんとなくんだけど、今回の任意退職、応じる気がするんだよねえ……あの子の言葉の端々に、自分はいつ辞めても構わないっていう覚悟？　みたいな感じがあつたもんなあ……この会社に対して執着していない。そういう意味では、私と似てるのかねえ……？）

麗子は、山田の冷静沈着だが威圧的に思える人相や、哀れに思う

ような言動、左目の下の泣きボクロなどを思い出しつつ、考えに更けた。

「わかりました。ありがとうございます。他言無用にしますので」

麗子は一度だけお辞儀すると、目の前の書類に手を伸ばし、そのまま席を立った。

「デスクの私物、大切なものはないので、捨てるなり、誰か欲しがる人にもあげるなり、ご自由に。ありがとうございます。」

麗子は姿勢を正し、深々とお辞儀した。課長も彼女の動きに合わせてすぐに席を立ち、お辞儀を返す。彼女はそれを見届けもせずに応接間を後にした。

ついさっきまで同僚だった皆々の視線を受けながら、ついさっきまで自分のものだったデスクに移動し、自分のものであるバッグを手にした。その際、一番遠い席にいる女性の姿が目に入った。

左目の下の泣きボクロ。

彼女の、なにかを察したような悲しげな表情に気づくと、麗子はふっと笑い返した。

デスクを後にし、出入り口の扉に移動する。道中、タイムカードのことを思い出した。

「早退しまーす！」

いつぞやのように元気な声を上げつつ、タイムカードを押した。

ガチャコンッ！

これで最後となる本日の勤務時間は、一時間にも満たなかった。

(2) (後書き)

いかかでしたか？ 楽しんで頂けましたら、幸いです。

様々な方のご意見をうかがいたいので、評価や感想を頂けましたら助かります。あと、とっても嬉しいです。

(3)

麗子は、最寄りの駅を目指して歩いている。その足取りは重く、弱々しい。

交通量の多い道。車線の多い道路に、幅の広い歩道。

出勤時には、サラリーマンやOLといった、同じ職種の人間ばかりが多く見られたが、今はチラホラ。いずれも焦っていたり、開き直ったような顔をしていたりする。遅刻でもしたのだろうか。中には、やる気に満ちた顔をした者もいる。

そんな通行人のことを眺めている麗子は、ふと、人の流れに逆らっているような感覚にとらわれた。皆がゴールを目指しているのに、自分だけがスタートに向かっている。

切なかつた。そして、何故か少しだけ罰が悪かつた……。

目指すスタート　もとい、最寄りの駅が見えてきたとき、麗子はぴたりと足を止めた。駅から視線を逸らし、横を向いた。そこは、ある店の前だつた。

《ひとときの幸せ》

看板にはそう書かれてある。

麗子は、その店の外観や、大きなガラス越しに見える中の様子に目もくれず、足早に扉に近づき、開けた。

カランカラン！

ガラス扉に取り付けられたベルが音を立てた。

店内はとてもしい香りに包まれていた。焙煎されたコーヒーの香りだ。

ここはカフェ。

木の温もりと、穏やかな光に包まれた空間になっており、清潔感にも満ちている。それでいて堅苦しさがなく、落ち着いた雰囲気を感じられる。

BGMは音楽ではなく、自然の音が流されている。今日は森林。風に揺れる木の葉や、小鳥のさえざりが聞こえてくる。

目を閉じると、ライトの光が木漏れ日に感じ、森林浴でもしているような気分させてくれる。

広くはないが、奥行きはあり、右手にカウンター。左手にはテーブル席が数えるばかり並んでいる。

右手に見える、磨かれた木のカウンターの奥の壁には、様々な産地の名が記されたコーヒード豆や、茶葉の入ったガラス容器、陶器製の洒落たカップとソーサー、曇りひとつないグラスがズラリと並んでいる。

そして、黒髪の男が一人。

髪を短く刈り込み、黒々とした細めのサングラスをかけているため、一見強面。

年の頃は麗子よりも年上で、30の後半から40の前半。

黒めのシャツとズボンに、コーヒを連想させるような焦げ茶色のエプロンを身にまとっている。

その姿からもわかるとおり、彼は、この店のマスターである。

「いらっしやい」

扉が開いた際のベルの音に気づき、マスターは顔を上げた。その見た目にそぐう渋めの声と、そぐわない微笑で、麗子を迎え入れる。サングラスで目元は見えないが、微笑んだその顔はなかなかインディー。

麗子は、挨拶でもするように小さく手を上げた。すると、マスターが、店の奥へと手を差し伸べた。指し示す先には一番奥のテーブル席がある。彼女は軽くお辞儀すると、そちらに歩を進めた。

もうすぐ、午前10時。

出勤や、朝食の時間帯を過ぎているからなのか、店内には客が一



人もいなかった。

麗子は、コの字型をしたソファに腰を下ろした。すると、そのままなく、マスターが水の入ったグラスとおしぼりを持ってやってきた。

それらをテーブルに置こうとしたとき、マスターは、麗子の表情が物悲しいことに気づいた。どうしたのかと気にかけていると、彼女もまた気づいて苦笑い。

「こんな時間にめずらしいでしょう、外回りでもないのに……実は、会社を辞めてきたんです。ほんとと言うと、リストラなんですけどね」  
そう言うと、麗子は肩をすくめた。

悲しい告白に、マスターは口角を下げ、つられたように悲しげな表情を浮かべる。

「……いつもの？」

マスターは、少しの間を置いてたずねた。麗子は小さく頷いた。それ以上のことは聞かず、注文を受けるとすぐにカウンターへ戻った。マスターの姿を横目につかいつつ、麗子はソファに身を沈める。今の気分としては、テーブルに寄りかかって額を押しつきたいところなのだが、ファンデーションが付いたりして迷惑だろうから、しない。

ガリゴリガリゴリ。

カウンターからなにかが碎けるような音が上がった。

マスターが、煎ったコーヒー豆を挽き始めたのだ。

この店では、注文を受けてから豆を挽く。そのため、ちょっと時間がかかるが、その分、味も香りも申し分ない。

麗子はこの店の常連だ。

会社に勤めて、まだ間もない頃のことだ。仕事でミスをし、ひどく落ち込みながら駅に向かっていたとき、この店の前を通りがかった。ちょうど一人の客が店を出たところで、すれ違ったのだが、そ

のとき、風に運ばれてやってきたコーヒーの芳香に誘われて、思わず足を止めてしまった。そして、つい訪れてしまった。そのとき、気分は重く沈んでいたが、マスターの入れた一杯のコーヒーを飲んだところ、嘘みたいになんか軽くなり、心も晴れやかになった。不思議とやる気が沸き起こり、またがんばろうと思えた。

それからというもの、マスターのコーヒーの虜となった。帰り道ということもあって、以来、ほぼ毎日通いつめている。

マスターが入れるコーヒーはただ美味しいだけではない。人を元気にさせる力があると、麗子は信じている。……だから、今日も。

今いる一番奥のテーブル席を、麗子は気に入っている。トイレに近いというメリットとデメリットがあることは、座る位置によっては柱の陰になり、他のテーブル席が見えず、向こうからも見えない見えるのはカウンターだけで、他の客の姿や、視線を気にせず、また、人通りの多い外の様子も見えないので、落ち着いてコーヒーを飲めるところである。この席は彼女にとって、まさに“ひとときの幸せ”なのだ。

麗子がこの席を気に入っていることは、マスターも知っていて、空いていれば、たとえ一人でもこの席をすすめてくれる。

独り静かに極上のコーヒーを楽しみ、気持ちを切り替え、午後からの仕事に精を出す。それが麗子の日課だった。……けれど、それも今日で終わりになるかもしれない。

(ああ……そういう意味では、あの会社に対して執着心があったかも……再就職、この店の近辺に勤められたらいいのに……)

麗子は遠い目をし、店内の景色を見回した。

これで見納め　というわけではないのだが、つい、そうしてしまっ

た) (……あ、会社で思い出した。そういえば、あの女の名前がなかった)

急に不機嫌な顔をした。

麗子が今、頭に思い浮かべているあいつ(……)とは、同じ課

の女性社員で、入社して二年目の後輩である。

顔はそこそこ。正直、自分の方がいいと思っっている。しかし、その後輩は彼女には無いものを持っている。胸である。巨乳なのだ。ホルスタインと呼びたくなるようなでかさだ。女は胸ではないと言いたい、たいていの男はその胸を選ぶ。

(むかつく……！)

名の知れた大学を出てはいるが、接して見ればすぐに露見する頭の悪さ。勉強はできるバカという奴だ。

脳ミソに行くはずの栄養を胸に取られたんじゃないかと、見るたびに思ってきた。

(巨乳女は頭が悪い　というのは迷信だと思う。でも、あいつは別だ……！　入社して二年も経つのに、未だに仕事を覚ええない！　一年目ならまだ許せる……けど！　二年目となったら我慢にも限度があるわ……！　なんのために会社に来てるんだっのっ！)

仕事は覚ええないが、男の名前や経歴は見事なほどに覚える。社内も、そして外も。なにかといえればトイレで化粧を直し、同族と男の情報を交換し合い、定時に帰って合コン三昧。理想の恋人や夫を探すためだけに会社に来ているような、そんな女だ。相手によってコロコロと性格を変え、男はほぼ味方につけて、女は互いに利用できる相手を確実に味方にし、山田のような人物を確実に敵に回す。ある意味、恐ろしい女である……。

(同じ女とは思えん……でも、生物学的に見ると、あれが女なのかねえ……?)

麗子は、学生時代に男らしいと言われたことを思い出し、ちよつと情けなくなった。

(私だったらあいつをまず切り捨てるけど、会社は選ばなかったわけだ……まあ、二年目で給料も安いし、男からの人気もあるし、他の会社で通用するとは思えないし……)

考えるたびに苛立ちが募る。言い訳しているような気分がする。

(なんで……?　なんで私なわけ……?　あいつより、私の方が断

然仕事ができるのに！　なのに、なんでっ！？)

つい叫んでしまう。……心の中で。

(意味わかんない！　気分悪いっ！　ああもう、いい！　どうでもいい！　考えない！　考えたくない！　あそこは、あいつを残すよ  
うなそんなところだったってこと！　そんなくだらないところ！　そ  
うよ！　そんなところなんだから、辞めてよかったのよ！　多めに  
退職金もらえるだし、さっさと見限っちゃおう！)

麗子は、自分自身に催眠術でもかけるように、必死にそう言い聞  
かせている。なおかつかぶりを振り、舌打ちまでして、嫌なことを  
忘れようと躍起になっている。

落ちて着こうと、目の前にあるグラスに手を伸ばした。ひんやりし  
た水が口に入った瞬間、奥歯に鋭い痛みが走った。

知覚過敏。

いやらしい痛みが口内を駆け巡り、頭へと突き抜けた。思わず身  
震いしてしまう。

痛みが静まるのを待ち、細く息を吸って吐いた。

(とりあえず、歯医者行こう……ああ、でも、ここのお水、やっぱり  
美味しい。……あれ、遅いなあ)

しみる奥歯を舌先で舐めて温めるついでに、この店で扱っている  
水の美味しさにあらためて感心していた麗子だが、ふと、コーヒー  
がまだ来ないことに気づいた。

カウンターに目をやると、ちょうどマスターがやってくるところ  
だった。

テーブルにコーヒーと、たっぷりのホイップクリームが乗ったパ  
ンケーキを置いた。

「？」

麗子が「えっ、頼んでないけど……？」と口にしようとする  
と、マスターがそれよりも早く、「サービス」と言った。

マスターは穏やかな微笑と、コーヒーとだけ書いた伝票を残して、  
カウンターへ戻っていった。

(マスター……！)

マスターの優しさに感動し、思わず目を潤ませてしまう。麗子は泣くまいと、誤魔化すようにカップに手を伸ばした。

飲むのに適した温度になっているブラックコーヒーを一口啜った。口の中にふわっと広がり、鼻へ抜ける焙煎された香りに酔い痴れる。

苦味と酸味の絶妙なまでのバランス。そして、ほんのかすかな甘味。

インスタントはもちろんのこと、ちゃんと豆を買ってきて、美味しい入れ方を調べてそのとおりにしても、この味を出すことはできない。他の美味しいと評判の店のコーヒーを試してみたが、いずれも、ここの味と魅力には勝てない。

コーヒーの美味しさに、思わず身体力が抜け、自然とため息がこぼれた。……すると、我慢していたはずの涙が、ホロリ。

「本当は辞めたくなかったよお……」  
自分にすらついていた嘘が口からこぼれる。

マスターの入れたコーヒーに素直にさせられてしまった。

「ハア……やっぱ美味しい……」

麗子は穏やかな顔をし、もう一度、ため息を吐いた。大きく、深く。

カップを置いて、ナイフとフォークに手を伸ばした。

一枚だけなのに、二枚三枚と重ねたようにふっくらしたパンケーキを三角形に切り取り、上に乗っているシナモンパウダーがかかったホイップクリームをちよつとだけつけて口に運ぶ。

「うんまいっ！」

フォークを持つ手を高々と掲げた。

「マスター、美味しいよお！ 最高！ これからも絶対通う〜！」

麗子は、カウンターにいるマスターに向かって言った。すると、彼は微笑み、ぐっと親指を立ててみせた。一見強面だが、実は気さくである。

ちょうどそのとき、出入り口の扉が開いてベルが鳴った。客の訪れに気づき、マスターはハツとし、素早く手を下ろした。頬をほんのりと朱色に染めながら、「いらっしやい」と応対する。彼、実はシャイでもある。

客の注文を受け、何事もなかったように豆を挽き始めたマスターの姿を、カウンターも含めて一枚の絵のように眺めながら、麗子はコーヒーとパンケーキを味わう。

飲むたび、食べるたびに、その美味しさに身体が震えてしまう。

(この組み合わせは最強だわ……！)

飲めば減り、食べれば無くなる。しかし、手を止められない。その矛盾を楽しみながら、ごっそり削り取られたようになっていた心を修復していった。

コーヒーを飲み干し、パンケーキが残り一切れというところで、妙な音がした。

麗子はすぐに隣の席に目をやり、手を伸ばしてカバンを取り上げた。中から取り出したのは携帯電話。それがブルブルと震えている。今の音は、マナーモードにしたままだった携帯電話のバイブレーション。

慣れた手つきで操作し、誰からか確認する。

液晶画面に映し出されている名前を見ると、麗子は少し目を大きくした。

「真……」

ある電話番号と、高城 たかぎ 真 まこと という名前が表記されていた。

(え、こんな時間になんだろう……?)

午前10時12分。

麗子は、どことなしか緊張した面持ちで通話ボタンを押した。そっと耳に押し当てる。

「もしもし……?」

『あ、麗子……? ごめん、仕事中に電話して』

「うん。大丈夫。真も仕事なんじゃないの？」

『いや、今、外に出てるんだよ。だから、平気』

「そう、それならいいけど……それで、なに？」

『ああ……えーっと、実はさ、大事な話があるんだよ。それで、時間、作れないかなって。その確認』

「大事な話……？ 電話じゃダメなの？」

『……うん。できれば、直接会って話したいんだ。無理か？ 仕事、忙しい？』

「あ、うん。大丈夫。時間、作れるよ。いつでもいい。……あ、今はダメ？ 私、今、外に出てるの。いつものカフェにいるんだけど」

『あつ、じゃあ、すぐに行くよ。今、近くにいるし。すぐに行くから』

「うん。待ってる」

『じゃっ！』

相手が電話を切ったので、麗子も電話を切った。

携帯電話を手に持ったまま、考える。

（大事な話……なんだろう？ なんか怖いなあ……話があるって言われて、実はリストラだったわけだし……まさか、別れ話とか……？）

嫌な予感がした。軽い悪寒を覚え、身震いする。

（でも、そんなに関係悪くないしなあ。最近は仕事が忙しくて会えてなかったけど、別に喧嘩したとか、冷めるとか、そんなんじゃないし……好き、だし……）

頬を赤らめる。

（相性も悪くない。……色んな意味で……。別れ話とかじゃないと思うんだけどなあ……でも、だったらなんだろう……？ 他に大事な話ってなにがあるかな……お金を貸してほしいとか？ いやあ、あいつは女から金を借りられるようなタイプじゃないな。会社をクビになったとか？ って、それは私だし。あいつはな

いない。一応エリートだしね。独立とかも今は考えにくいなあ……  
うーん、なんだろう？)

小首をかしげながら、携帯電話をカバンの中に戻した。

テーブルに左肘をつき、手の上に顎を乗せて考えに更ける。右手を皿の上のフォークに伸ばし、パンケーキの残りの一切れを口へ運んだ。行儀の悪い食べ方でパクリと頬張ったとき、頭にある言葉が浮かんだ。

(まさか、プロポーズ……？ えええっ!?)

思い浮かんだ言葉に驚き、思わず姿勢を正す。

(……いや！ いやいやいや！ ないない！ ないっ！ ……とも  
言い切れないかも……。っていうか、もしそうだったら嬉しい……  
かも)

口にフォークを咥えたまま、なにも乗っていない皿をじっと見つめ、自問自答する。

(大学のときからだから……もう7年。結婚かあ……うん、時期としては十分……会社をリストラされたその日にプロポーズ……？

……ありだ。このまま、主婦になっちゃうっていうのも悪くない。

リストラで、ようはクビなわけだけど、ここで結婚したら、結果的には寿退社ってことよね。不幸の後に幸運が……!?! 三十を前にして無職になったと沈んでたけど、沈む瀬あれば浮かぶ瀬あり。地獄で仏に会ったよう。人間万事塞翁が馬!)

念仏でも唱えるように、知る限りの諺を心の中で呟くと、ようやく口からフォークを抜き、パンケーキの最後の一切れを咀嚼する。

口の中に甘味が広がる。すると、顔がほころんだ。

ロマンティックなプロポーズの瞬間や、薬指に指輪をはめた自分の左手を想像したり、向こうのご両親にあらためて挨拶しなければいけないとか、純白のウェディングドレスにその身を包んだ自分の姿を鏡越しに眺めてみるなど、しきりに妄想し、酔いしれている。頭の中の世界では、すでにハネムーンを迎え、遙か彼方に旅立っていた。



「エへへ……」

表情がゆるんでいる。

そのとき、マスターが客に飲み物を出し、カウンターに戻ろうと  
していた。幸せの絶頂にあり、不気味に笑っている麗子に気づいて、  
ハツとした。

見てはいけないものをみてしまったとたじろぎ、視線を逸らそう  
としたとき、カップが空になっていることに気づいた。

マスターはカウンターに戻り、おかわりを用意するべく、コーヒ  
ーミルに事前に煎ってあった豆を入れ、ノブを回そうとした。する  
と、ベルが鳴った。

見ると、扉が開き、スーツ姿の男が一人、入ってきた。

「いらつしゃい」

二十代後半と思われるその男。マスターとは顔見知りのようで、  
軽く会釈すると、さっと店内を見回し、奥のテーブルに歩を進めた。  
マスターは豆を挽くのを中断し、水を注いだグラスとおしぼりを  
トレイに乗せて、カウンターを出た。

男は、麗子がいる一番奥のテーブルに移動し、向かい合わせにな  
った。

マスターも一番奥のテーブルへ向かい、男の前に水とおしぼりを  
置いた。

「コーヒーを」

水に手を伸ばしつつ、男は注文した。その声は、先ほどの電話で、  
スピーカーを通して聞こえてきた声と同じものだ。つまり、彼が高  
城 真である。

マスターは伝票を手に取り、注文を書き記した。それを元の位置  
に戻すと、麗子の空になったカップとソーサー、パンケーキの皿を  
下げて、カウンターに引き返した。

「ゴメンな、いきなり」

「うづん……」

二人の会話が聞こえてきたが、客の会話を聞いてはいけないと、

マスターは聞こえないふりをし、豆を挽き始める。

ガリゴリガリゴリ。

おかげで声は聞こえなくなったが、それは豆を挽く音に遮られてのことではなく、単に二人の会話が途絶えてしまっていたからだ。

どうも、いつもと様子が違う。互いに緊張しているようで、喋り出せないでいるようだ。麗子は気まずそうにし、それでいてなにかを期待しているような、そんな表情を浮かべている。一方の男  
真は、思いつめたような顔をして俯いている。

そんな二人を見守りつつ、豆を挽き終えたマスターは、二人分のコーヒーの抽出に取りかかる。

あたりに、焙煎された香りが広がる。

淹れたばかりのコーヒーを注いだ二人分のカップを乗せたトレイを手に、再び二人の元へ向かう。

「ねえ、電話で言ってた大事な話だけど……なに？」

マスターが二人の前にカップを置いたところ、それをきっかけにするように麗子が発言した。真も、そしてマスターも、思わず身を固める。

邪魔してはいけないと、マスターはそそくさとその場を後にした。

「あ、ああ、それなんだけど……」

真は口ごもった。彼の言葉に期待し、チラチラとうかがう麗子。

そのときの彼は未だに思いつめたような表情をしており、どうにも様子がおかしい。想像とは温度差がある。

（あれ、プロポーズじゃない……？）

麗子がそう思ったとき、真が急にテーブルに手をついて頭を下げた。

「ゴメン！ 俺、おまえに隠していたことがある……実は、ずっと前から、麗子以外の女性と付き合ってた……！ つまり、その、浮気……してたんだ……」

真は頭を下げたまま、その言葉を絞り出した。  
とたん、店内の空気がピンと張りつめた。

「え……」

その声を漏らしたのは、麗子だった。

あまりに突然で、すぐには理解できなかった。次第にわかってきて、自分が今おかれている状況を察し、（ああ……そういうこと……）と納得した。

恋人が浮気していたなんて事實はまったく知らなかった。思ってもみなかった。まさに青天の霹靂である。そのショックは大きかった。かなりのもので、悲しい気持ちになった。残念でもあった。心が締め付けられた。ギョツと握り潰されたようだった。……けれど、少しホツとした。正直に打ち明けてくれたことや、「してた」と言葉が過去形だったことにかすかな喜びを覚えたのだ。

（ハ―ア……違ったんだ……）

期待していたときの自分を思い浮かべ、恥ずかしさと情けなさを覚えた麗子は、ふつと鼻で笑い、諦めたようにため息を漏らした。ずっと正していた姿勢を崩して、ソファ―にその身を沈めた。

そのとき、頭を下げたままだった真が、さらなる告白をする。

「彼女とは二年前から……浮気だから、いけないことだとはわかってただけ……でも、今はもう浮気じゃないんだよ。本気……なんだ。彼女に……彼女が、妊娠したんだ。俺の子なんだ。だから、その……結婚、しようと思ってる。しなきゃいけないし、したいとも思ってる。言い訳したくないからさ、これ以上嘘を吐きたくもなかったし、だから、ちゃんと話しておこうと思って……麗子、おまえには悪いと思う。本当に悪いと思ってる。でも、そういうことから……だから、別れてほしいんだ。別れてくれ！ ゴメンッ！ 本当に、ゴメン……！」

……頭の中が真っ白になった。

「……」

無言。

麗子は、ソファに沈んだまま、動けなくなった。声のひとつも出せない。なにも考えられなくなった。ただ、テーブルの上の、手をつけていないコーヒークップを見つめている。顔を上げられず、ましてや、真と目を合わせられない。

頭の中も心の中もグチャグチャしていて、気持ちが悪い……。

(浮気が、本気……彼女……妊娠……嘘……別れて……)

それらの断片的な言葉を繰り返し、繰り返して、ようやく理解しかけたとき、真が席を立ち、ポケットから取り出した小銭をテーブルに置いた。

「……ゴメン……」

その言葉を喉の奥から絞り出すと、その場を後にし、真っ直ぐ出口を目指した。一度も振り返らず、扉を開けて外へと……。

そのときに鳴ったベルの音は、妙に切なかった。

……麗子がカバンに手を伸ばしたのは、それから、しばらくのことだった。

サイフを取り出して、千円札一枚を、裏返しに置かれている伝票の上に置いた。すぐに席を立ち、サイフとカバンを両手に抱え、出口を目指す。

客と、マスターの視線を受けながらカウンターの前を通ろうとしたとき、ふとなにかを思い出したようにその足を止めた。

「コーヒー、美味しかったです」

精一杯の作り笑顔を浮かべ、マスターにその言葉を送ると、麗子はまた歩を進めた。

麗子が顔を正面に戻したとき、マスターは見た。彼女の顔がくしやりと歪むのを……。

マスターは一番奥のテーブルに目を移し、麗子のために入れたコーヒーが一切手を付けられていないまま残されているのを知った。そのとき、ベルの音がしたのでまた目を移し、ちょうど店を後にする彼女の後ろ姿を見つめた。

丸まり、小さくなった背中に“黒い霧”のようなものが見えた。

「！」  
マスターはハツとし、あらためて麗子の背中を見つめるも、扉の前を離れたため、姿が見えなくなってしまう。彼は急ぎ、彼女を追いかけた。

駅の方へとぼとぼと歩いてゆく麗子。肩を落として、見るからに憔悴している彼女の後ろ姿を見つめると、マスターはずっとかけ続けていたサングラスを外し、なにも通さず、裸眼の状態であらためて見た。

黒い靄が見える。さっきはほんの一瞬のことで不確かだったが、今ははっきり見える。麗子の身体にまとわりついており、その身を覆い隠さんばかりだ。

すると、マスターの表情が悲しみの色に染まった。まるで、大事ななにかを失くしてしまったようだ。

前から人がやってくるのに気づき、すぐにサングラスをかけた。そのときに垣間見えた彼の眼は 瞳の色は赤かった。血のような鮮やかな色をしていた。

サングラスで眼を隠し、遠のいてゆく麗子から視線を逸らした。店内に戻るべく、開けたままにしてあった扉に手を伸ばしたとき、マスターはぽつりと呟いた。

「……さようなら……」

ベルがまた、切なくて哀しい音色を奏でた。

(3) (後書き)

いかかでしたか？ 楽しんで頂けましたら、幸いです。

様々な方のご意見をうかがいたいので、評価や感想を頂けましたら助かります。あと、とっても嬉しいです。

カーテンの隙間から光が漏れている。

「うっん……」

麗子は寝返りを打った。うつ伏せになり、枕に顔を押しつけて光を遮断する。その際、左手がベッドの下に滑り落ち、絆創膏が貼られた手首を角にぶつけてしまった。

「いったあつ!？」

痛みで強制的に目覚めさせられた麗子。左腕をぴんと伸ばし、しばし震えていた。

寝惚け眼で痛む左手首を見れば、絆創膏の中央部分が赤く滲んでいる。どうやら、傷が開いてしまったようだ。

「うっ、痛いなあ……ああ、頭重い……うっぶ、気持ち悪い……」

ひどい顔をしている。脱力し、また枕に顔を埋めた。ズルズルと全身を伸ばして、再び横たわる。……が、お腹を下にしていると気分が悪いため、すぐに横を向いた。

光のまぶしさに目を細めつつ、壁にかけられた時計をうかがう。

9時45分。

「あつ! ……ああ、そっか、もういいんだ」

目覚まし時計をセットし忘れたことに気づいて飛び起きた。……が、すぐに思い出した。

遅刻のほが……。

心臓の鼓動を感じながら、眠気がすっかり覚めてしまったことに苛立つ。

「今日どうしようかなあ……へっ、30を目前に無職になっちゃった……恋人にもフラれ、有るのは金ばかり……あ、そっいえば、退職金、どうなってるんだ……?」

頭が重く、胃も重く、身体を起こすのもおっくうで、足をベッドから下ろして膝をつき、横着だが器用にも座った。

「二日酔いっていうのは…… ようするに…… 脱水症状…… 水を取ればいい…… 糖分を取ればなおのこと良し…… 胃が荒れている恐れがあるから…… 冷たいものよりは…… 温かいものを…… スポーツドリンクを温めて飲みましょう……」

四つん這いになり、もそもそとベッドを離れる。呪文でも唱えるようにぶつぶつと呟きながら、開けっ放しになっていた扉をくぐり抜けて、寝室からリビングへ。脱ぎ散らかしたとしか思えない服や下着を横へ押しやりつつ、キッチンを目指す。

そんな麗子の今の姿だが、両目は腫れぼったく、髪はまるでライオンのたてがみのよう。着ているものは、寝間着として使っているよれよれのTシャツにショーツだけと、とてもじゃないが人前に出られる姿ではない……。

それらが改善され、人前に出られる姿になったのは、およそ三時間後 昼過ぎのことだった。

シミ、そばかす、肌荒れなどを隠す程度の化粧をし、髪を梳いてセットするのが面倒なので、簡単に後ろで束ねてポニーテールにした。ジョギング用にと買ってあったパーカーにジーパン、シューズというラフな格好をし、充血した目を隠すためのサングラスをかけ、ポケットにサイフだけを入れて家を出た。

麗子は、駅前の銀行を訪れた。

ATM。

まずは残高照会し、現在の預金額を調べた。

「おお……！」

軽く驚くほどの金額だった。

退職金がちゃんと振り込まれていることを確かめ、安心した。

(課長、約束どおり、すぐに振り込んでくれたんだ……)

とりあえず、当面の生活費用にと5万円を下ろし、銀行を後にした。

自宅を目指すように歩き出した。



トボトボ。

(これからどうしよう……親には泣きつけない……とりあえず、ハローワークにでも行かなきゃなあ……でも、今のご時世、再就職ってそう簡単じゃないんだろうなあ……ああ、そういえば、資格とかなんにも持ってない……大卒っただけだ。パソコンを人並みに扱えますって、今時当たり前だよな。ああ……だから皆、暇さえあれば勉強して、資格を取ろうとしてたんだ……なるほどねえ……やつぱり、資格があつたら有利なのかねえ……？ 資格取ろうとかなあ……どうせ暇なわけだし。車の免許も取りたいなあ……あ、その前に歯医者に行かなきゃ……)

そんなことを考え、とりあえず歩を進めていると、グニヤツ、という妙な感触が足に。

アスファルトじゃないものを踏んだとすぐにわかった。

「ん？ あ……」

足を上げてみれば、それはガムだった。グニョ〜ツ、と伸びた。

「うええ……」

半歩後ろへ下がり、ガムがくっついた側の足を地面にこすり付けて、強引に剥がそうとするが、それが災いし、ベタリと張りついてしまつて取れなくなつた。ガムがまだやわらかかつたようだ。つまり、吐き出されて間もない……。

「最悪だ……」

一気に気分が滅入つた。

もう一度地面にこすり付けるが、やはり取れず、手で取るなんて絶対に嫌だから、仕方なくそのまま歩き出す。

ニチャツ、ニチャツ、

不快な音と感触が一々癪に障る。

「どのどいつだ……！ マナーを守れないならガム食うな……！」  
それまであてもない感じに歩いてきた麗子だが、今は帰宅するべ

く早足で歩いている。このまま不快な思いをしないし、早急にガムを取り除きたかった。何故なら、このシューズは新品なのだ。ジョギング用にと購入してだいぶ経つが、今日初めて履いたのである。だから、とにかくガムを取りたかった。

……しかし、無情にも邪魔する者がいる。

(くそつ、また赤か……！)

横断歩道を渡ろうとするたびに信号が赤になり、一々立ち止まらなければならなかった。交通量が多いから信号を無視して渡ることもできず、苛立ちが募る。

普段であれば特に気にも留めず、苛立ちはしても仕方ないと気持ちを切り替えるのだが、ガムのことや、これまでの色々もあって、まるで嫌がらせを受けているような気がしてならなかった。

舌打ちしながら待っていると、ようやく信号が青になった。

(遅い……！)

スタートダッシュ。

麗子は誰よりも早く歩き出した。急ぎ横断歩道を渡ろうとするが、ここでまだ苛立ちを助長させることが起きた。

風に吹かれてどこからともなくやってきたチラシを、ガムを踏んだ足で踏んづけたのだ。チラシがガムにくっつき、足に張りついてしまった。

それは、横断歩道の向こうで配っているパチンコ店の宣伝用のチラシだった。

「うぐぐ……！」

麗子は立ち止まり、悔しそうな声を漏らした。

二度あることは三度ある。泣きっ面に蜂。弱い目に祟り目。痛む上に塩を塗る。

怒りが頭を駆け巡り、こういった状況に見合った諺が次々に浮かんだ。

「ハア……」

わなわなと震えていた麗子だが、とたんに脱力し、大きな大きな

ため息を吐いた。

腹が立ち過ぎて、もうどうでもよくなった。怒りよりも、呆れや情けなさが先立った。

横断歩道の中ほどに立ち止まっている麗子を、一人、また一人と追い越してゆく。

（フツ、まあ待て。待て待て。ここはポジティブに考えようじゃないか。紙にくつついたのは、ある意味ラッキー。このまま紙ごと外しちゃえばいいんだから。きつと、きれいに取れるわよ、うん！）  
心を鎮めようと努め、大きく深呼吸。……落ち着いた。

もう一方の足でチラシを踏んで、ガムもろとも外しにかかる。

と、そのときだった。

麗子から見て左手すぐの道路を、前方から、一台のバイクが走ってきた。ヘルメットを通して見えた信号は青だった。赤信号に変わる前を通り過ぎてしまおうとスピードを上げ、交差点を通過しようとしたとたん、右隣の追い越し車線を走っていた車が突然左折を試み、まさに目前に迫った。

「！」

ブレーキをかける余裕はなかった。車の左前輪部に激突。スピードを上げていたこともあり、勢い止まらず、運転手もろとも跳び上がった。

「へ？」

激しい物音に驚いて顔を上げると、目前に、回転するバイク（・・）が

それをバイクだと認識した刹那、それは、一陣の風とともに顔の横スレスレを通り過ぎ、頬をわずかにかすめた。

ガツシャーンツッ！

荒々しい音が聞こえてきた。後方から。直後、ガラスが割れるような音もあがった。

振り返れば、交差点の角にある店のガラスを突き破っていた。そのとき、頬に痛みを覚えた。触ると、手に血が付着した。わずかだが頬が切れている。どうやら、まさに紙一重だったようだ。

「キヤア　ッ！」

事故を目撃した女性が悲鳴を上げた。

「事故だ！」

「バイクが突っ込んだぞ！」

「おいおい……！　救急車、呼んだ方がいいんじゃないか！？」

通行人が口々に騒ぎ始めた。……その中、麗子だけはその場に立ち尽くし、言葉を失っている。彼女は今、凄まじい悪寒をその身に感じていた。

（今の、なに……？　私、死ぬところだったんじゃない……）

手のひらについたわずかな血と、足の下のチラシを見る。

（当たらなかつたけど、ここに立ってなかつたら、そもそも当たるはずがない……なに、これ？　なんか、おかしくない……？　一昨日から悪いことばかり……まるで悪いことがいっぺんに襲いかかってきてみたい……！）

ゾクリッ。

また強い悪寒に見舞われた。なにかの気配を察し、すぐさま後ろを振り返る。……が、誰もいない。見えるのは、横断歩道の手前で事故の様子をうかがっている通行人の姿と、事故を起こした車。加害者。交差点に倒れているバイクの運転手。そして、おびただし量の鮮血……。

それらに加え、信号が点滅を始めているのに気づいた。

（ここにいたらもつと悪いことが起きるかも……！）

ただちにここを離れるべきだと思った。チラシのことは忘れ、ひとまず横断歩道を渡り切るべく、バイクが突っ込んだ交差点の角にある店を背にする形で走り出す。すると、背後から赤い光が差した。

けたたましいまでの音があがった。

店内で爆発が起き、あたりに無数のガラス片が飛び散った。その中にはバイクの残骸もあって、それは背を向けていた麗子めがけて飛んだ。しかし、直撃はせず、頭をかすめただけだった。彼女の頭上を飛び越え、歩行用の信号機を破壊し、その向こうにあるビルの一階に突っ込んだ。

頭に軽い痛みを覚えたと思えば、額から目元にかけて温かいものが……。

わかりきっていることだが、それは血。頭頂部のあたりがほんのわずかだが切れていた。かすめた際に切れたのだろうが、髪を束ねるためのゴムもついでに切れていた。

麗子は確信した。なにかが襲ってきている。目には見えない、なにか(・・・)が。

全身で感じる。ひしひしと感じられる。

(帰ろう……もう帰ろう……！ 早く帰りたい！)

血が目に入り、片目が赤く濁ってしまった。だが、そんなことはどうでもいい。些細なことだと気にもせず、麗子はその場から逃げるように走り出した。横断歩道を渡り切り、事故に戸惑っている通行人を避けて自宅へ急ぐ。……だが、辿り着けなかった。

地面に散乱していたチラシの一枚を、ガムのせいでチラシがへばりついてしまった方の足で踏みつけて、ツルンツ、と滑ってひっくり返り、天を仰いだ。

ガンツ、という音が後頭部に響いた刹那、鼻の奥で嫌な臭いがした。

目の前が真っ白になった。そして、真っ黒になった……。

(4) (後書き)

いかかでしたか？ 楽しんで頂けましたら、幸いです。

様々な方のご意見をうかがいたいので、評価や感想を頂けましたら助かります。あと、とっても嬉しいです。

闇の中で声がした。

「もしもし、聞こえますか？ もしもし！」

誰かが呼んでいる。そう思ったとき、とたんに目の前がまぶしくなった。

「ハッ!？」

大量に息を吸い込み、まさにハッとした。目を見開く。

青い空と白い雲。

右手にビルと思われる外壁がうかがえ、左手にはなにもない。と思いきや、誰かの顔がひよっこり現れた。幼い顔だ。

誰かと思ひ、意識したところ、真っ赤な瞳に見つめられた。

目が合った。

「ああ、やっと気づいてくれた」

幼い顔がニツコリ笑った。

屈託のない笑顔を浮かべているそれは、小学校の高学年ぐらいの男の子。

血のような色の瞳を有し、肌は透き通るように白く、髪も真っ白。

……いや、少し銀が入っているように見えることから、プラチナブルンドである。

「誰、キミ……」

見知らぬ少年が覗き込んでいるものだから、麗子は眉をしかめてそうたずねた。そんな彼女は今、横断歩道の手前の歩道にいる。アスファルトでできた地面に横たわっている。

(外人……？ でも、顔立ちが日本人っぽい……)

じつと見つめていると、少年が笑顔のままに手を差し伸べてきた。麗子は戸惑いつつも、その小さな手を掴もうとする。のだが、彼の風貌の異質さに気づいてしまった。

ぼろきれのような黒衣を身にまとい、黒くて長い棒のようなもの

を背負っている。その棒だが、地面につきそうになっている下側の先には、毒々しいまでに赤い三日月を半分にしたようなものがくっついている。それは、緩やかな湾曲を描いた長い鋭利な刃だった。根本は幅広く、先端に近づくと従って細く、鋭い。

それは一般的に、“鎌”と称されるもの。それも、“大鎌”や“草刈り鎌”と呼ばれる類のものである。

人間味が薄く感じられる少年の風貌と、その背負っているものに気づいた麗子は、もう少しのところで手を止めた。

「まつ、まさか……」

麗子は顔を強張こわばらせた。出した手をそっと引く。

「あれ、気づいちゃいました？ フフツ。まあ、でも、普通はわかりますよね」

少年は苦笑した。

「キツ、キミ、誰なの……！？」

麗子は上体を起こしつつ、少年を警戒し、距離を取るうとする。

「誰って、すでにご存じなのでは？」

少年は小首をかしげた。

「……………いやっ！ いやいやいや！ そんなことありえないって！ ないないっ！ 絶対にないっ！」

脳裏に浮かんだある名称。麗子は自らそれを否定し、振り払わんとかぶりを振った。

「おやおや、ダメですよお、自分に嘘ついちゃ。自分には素直じゃないと。ほらほら、下を見て」

少年は差し伸べた手を返し、麗子の身体の下を指差す。

「？」

つい目で追ってしまった。するとどうだ、身体の下に人の足が二本、あるではないか。

「えっ！？ わっ！ ごめんなさい！」

驚き、無意識に謝ってしまった。慌てて飛び退こうとするが、はたとあることに気づき、静止した。



誰かのものと思われるその足は、見覚えのあるシューズを履いており、その片方の裏に、これまた見覚えのあるチラシがぺたりと貼りついていた。

「……嘘でしょ……」

消え入るような声を漏らすと、麗子は、首だけを後ろに振り返らせた。そして、見た。自分の下に横たわっている女性の顔や上半身を。

見覚えのあるパーカーを着た女性の顔は左頬がわずかに裂けており、額から流れ落ちてきた血が右目に入って赤く濁っている。少量の鼻血も見られる。ダークブラウンに染められた長い髪が、地面と接する後頭部からあふれ出した鮮血にまみれている。意識がないのか、目は虚ろだ……。

生气というものをまるで感じられないその顔には見覚えがあつた。見慣れた顔だった。とても見慣れている。毎日見ている。一日に何度も見る。何故ならそれは“自分”。

まったく同じ顔、同じ姿をした女性を目の当たりにし、麗子は言葉を失った。

「一応言っておきますが、これは夢ではありませんよ。現実です。今、ご覧になつているのは、立花 麗子さん、間違いなくあなたです」

傍らに立っていた少年は、麗子の視線の先に移動し、足元にいる、横たわつたまま動かない女性を指差して言った。

「………キミってさあ、あれでしょ……？ 死神、なんだよね……？」

自分としか思えない女性を見つめ、しばし沈黙していた麗子は、ふいにたずねた。

「はい。おっしゃるとおりです。ボクは死神です」  
少年はあっさり肯定し、自分の胸に手を当てた。

「………じゃあ、あれだ。私、死んだ……？ 死んじやつた……？」

再び沈黙し、再びたずねた。

「……はい。立花 麗子さん、あなたはお亡くなりになりました」  
少年はわずかな間を置いて頷いた。

「……」  
麗子は二度沈黙する。

「お気持ちはわかります。信じられないのも無理はありません。ですが、これはまぎれもない事実であり、現実。もはや、どうすることもできません。どうか、ご理解下さい」

「……死因は？」

麗子は、倒れているもう一人の自分を見つめ、呟いた。

「え、死因ですか？ ……えーっと、足を滑らせて転倒し、後頭部を強打。頭蓋骨を骨折。脳挫傷が致命傷となり、死亡……です」

少年は懐から黒い手帳を取り出し、開いた。ページをめくり、あるところで止めて確認。記されている死因を読み上げ、説明した。すると、とたんに麗子の形相が一変した。顔を正面に戻し、すつくと立ち上がる。振り返り、手を伸ばして少年に掴みかかった。

「わっ、わっ」

突然のことに驚く少年に対し、麗子は怒りに満ちた表情を近づけた。

「なんでよ……なんで、そんな死に方なのよお……！」

また一変。今度は泣きそうな顔になった。

「へっ？」

「なんでそんな死に方なのかって聞いてんのよ！？ 滑って転んで頭ぶつけて死ぬなんて、それもチラシで……！ だったら、その前の事故はなんだったのよお……！」

麗子は、キョトンとしている少年を持ち上げ、前後に激しく揺すった。

「そっ、そこですか……！？」

「よりにもよってそんな死に方するなんて、恥ずかしくて死んでも死にきれないわよ！ 未代までの恥だ……！」

「未代つて……その末は、立花 麗子さん、あなたでしように……」  
少年は抵抗せず、まるで身を任せるように揺さぶられている。

「そんなことはどうでもいい！ どうせ殺すんなら、もっと派手に殺しなさいよね！」

「そんなことつて、言い出したのはそちらじゃないですか……後、訂正しておきますけど、ボクたちは殺したりしませんから。死を与えたりはしません。すべては時の運です。いわゆる、運命です。ボクたちは死後のお世話をしているに過ぎません」

少年はちよつとムツとしながら、そう答えた。

「え、そうなの……？」

「そうです」

「……じゃあ、この怒りは誰にぶつけたらいいわけ？」

興奮が冷めたかに見えた麗子だが、見るからに不機嫌な顔をした。

「ご自分か、神様にでもぶつけてください。ボクにぶつけるのは八つ当たりですから」

少年はまず麗子を指差し、次に空を指差した。

「私としては八つ当たりでも構わないんだけどねえ……」

少年の胸倉から片手を外し、五指を小刻みに動かしながら顔に近づける。

「しょうがない方ですねえ……別に構いませんよ、お好きにどうぞ。

……でも、そんなことしたって意味ないですよ。殴られようが、つねられようが、くすぐられようが、ボクはなにも感じませんから。

ちなみに、立花 麗子さん、あなた自身もそうなんですよ」

「え？」

麗子は、少年の頬をつねろうとしていた手を止めた。

「ボクに触っている感覚、ありますか？」

少年は、自分の胸倉を掴んでいる麗子の手を指差した。

「え……あ、あれ？」

指摘されて、ようやく気づいた。胸倉を掴んではいるが、その感触がまるでない。持ち上げているのに重さも感じない。頬に触って

みたが、肌触りも、温もりも感じられない。柔らかそうなのに、柔らかくもない。そもそも、自分の身体が感じられない。確かにここにいるのに、まるでいないような……。

「なっ、なによこれ……!?!?」

麗子は驚き、思わず少年から手を離してしまった。彼は真下に落ち、そのまま、うまく着地した。その際、足音も、衣擦れの音もしなかった。

「立花 麗子さん、あなたは今、精神のみの状態なんです。肉体はそこに倒れている方。わかりやすく言えば、あなたは今、幽霊なんですよ」

少年は、麗子のことを指差した。

「幽霊……? ……足、あるけど?」

麗子は足元をうかがい、自分の足がちゃんとあることを確認した。

「それは迷信です」

少年はすかさず答えた。

「あ、そう……」

返答があまりに早く、その上、素っ気なかったため、麗子はちよつとムツとした。なんとなく馬鹿にされている気がした。

そのとき、どこからともなくサイレンが聞こえてきた。けたたましいその音は徐々に近づいてくる。

目の前の道路に一台の救急車が停車した。後ろが開いて、救急隊員が二人、素早く下りてきた。その二人は、歩道に倒れている麗子の元へ駆け寄った。

その際、一人が、立っている方の麗子に迫った。

「ちよっ、うわっ!?!?」

咄嗟に避けられず、ぶつかってしまったそのとたん、麗子は大きく弾き飛ばされた。

少年もぶつかりそうになったが、器用にかわした。

「ぎゃんっ!」

麗子は横断歩道の中央まで飛ばされた。が、交通整備をしていた

警官に当たってまたも弾き飛ばされ、信号機を失った柱にぶつかってようやく止まった。

まるで車にはねられたかのような結構な衝撃だったので思わず悲鳴を上げてしまったが、痛みは一切無かった。

「大丈夫ですか？」

少年は、救急隊員や通行人にぶつからぬよう器用に移動し、麗子に歩み寄った。

手を差し伸べる。

「いつ、今のなに……!？」

麗子は戸惑いつつも、少年の手を取り、身体を起こそうとするが、彼の手の感触がないのでさらに戸惑う。

自分の身体の重さや、重力なども一切感じず、軽やかに立ち上がれてしまった。

「ボクたちは、生きている方に接触すると拒絶され、弾き飛ばされてしまうんですよ」

「拒絶……?」

麗子は今、軽い混乱状態にあり、しきりに眉をしかめている。

そのとき、もう一人の麗子の状態を確かめていた救急隊員たちが、急を要するという診断を下し、急ぎ頭を固定して、動かさぬよう注意しながらストレッチャーに乗せ、車内に運び入れた。そして、あつという間に走り出してしまった。

サイレンが遠ざかる。

「あつ、ちよつと！ 私の身体！」

救急車がもう一人の自分に乗せて走り出したことに気づき、慌てて追いかけてようとす。すると、少年がさかさず彼女の手を取り、制止した。

「立花 麗子さん、もう一度言いますが、あなたはすでにお亡くなりになられています。早くて数分。遅くても数時間後には心臓が完全に停止し、脳や各臓器への血流が途絶え、死にます。そして、腐り始めます。精神と魂が乖離してしまつた以上、もはや肉体に戻る

ことはできませんし、生き返ることも不可能です。諦めて下さい」

冷淡とも思えるその口調にカツと来て、麗子は、振り返りざまに平手を振るい、少年の横つ面を渾身の力で叩いてしまった。……が、なんの音もしなかった。叩いた手も、なにも感じない。

「……失礼しました。言葉が過ぎましたね。配慮すべきでした」

少年は、叩かれたことで横を向いた顔を正面に戻すと、何事もなかったかのように平然とした表情を浮かべ、言った。そして、深々と頭を垂れた。

「……ゴメン……」

すると、麗子も謝った。頭に血がのぼったとはいえ、思わず叩いてしまったことに悪気を感じている。怒りの色を反省の色に変えて、謝罪の言葉を絞り出した。すると、少年は顔を上げ、驚いたように一瞬、キョトンとした。が、すぐにニツコリ笑った。

「立花 麗子さんって、善人いいひとだったんですね」

「え……なんで？」

「だって、すぐに謝られたじゃないですか。自分の落ち度を認めるのは難しいことです。相手にも落ち度がある場合は特に。だから、それを認め、すぐに謝れるあなたは善人です」

「は、はあ……」

麗子は、面と向かって善人だと言われたことに戸惑い、小っ恥ずかしさを感じている。

「すみませんでした、ひどいことを言っつて。いきなり胸倉を掴まれたりしたので、乱暴な人だと誤解していました」

少年はぺこりと頭を下げ、丁寧なお辞儀をした。

「あ、いや、それを言ったら私も、色々不適切な発言を……」

麗子は自分の発言を思い出し、罪悪感にとらわれた。後、見るからに幼い子供に対して大人げない行動を取ってしまった恥ずかしさに自己嫌悪に陥る。

「アハハ、不適切な発言って、なんだか政治家みたいですね。あっ」

少年はなにかに気づき、麗子の腕を掴んで横に引っ張った。背後から通行人がやってきて、当たりそうだった。

「えっ、ああ、そういうこと」

腕を引っ張られた意味がわかり、納得。

「うーん、ここだと落ち着いて話ができませんね。移動しましょう。よつと」

少年は後ろ手に、背負っている鎌の長い柄を掴んで取り、掲げた。すると、彼の身体が引っ張られるように浮かび上がった。

「わっ、うわっ」

腕を掴まれている麗子も浮き上がる。彼女はうろたえ、思わず少年の手にしがみついた。

「ビルの屋上に上がります」

その言葉どおり、交差点の角に建つビルの屋上に上がった。

麗子を恐がらせないようにと配慮し、静かに降り立った。

「ここなら通行人はいません」

麗子の腕を離し、鎌を再び背負った。

「そりゃあいないだろうけど……」

麗子はハラハラしている。高所恐怖症ではないが、それでも、単身飛行ともなれば話は別だ。とはいえ、胸に手を当てても心臓の鼓動は感じない。

「色々あって説明が遅れましたが、あらためまして。この度、

立花 麗子さんの死後のお世話を任されました、死神の命みことと申します。命いのちと書いて、命みことです。よろしくお願いします」

少年は自己紹介し、自らを命みことと称した。

「ミコト……？」

「はい。……なにか？」

「えっ、あ、ううん、なんでもない……」

麗子は軽く慌て、素早くかぶりを振った。

「そうですね。お亡くなりになってまだ間もなく、混乱されているでしょうが、死者の方が地上に滞在できる時間には限りがあり

ます。なので、申し訳ありませんが、今後の手順を簡単ではありませんが説明させて頂きます。まず、魂の善悪の重さを秤はかりにかけ、どちらの傾きが大きいかを調べます。善に傾けば天国への通行許可が下り、悪に傾けば、残念ながら、地獄へ強制的に落ちて頂かなければなりません。天国、地獄、どちらの道が選ばれるかは、立花麗子さん、あなたがこれまでどのような人生を歩まれてきたか、それに大きく影響します。まあ、でも、ボクが見た限りでは善人なので、大丈夫だとは思いますが。あ、ところでなんですけど、もし、なにか思い残したことがあったら、遠慮なくおっしゃって下さい。それが叶えられる願いであれば叶えますよ。ただし、生き返りたい。地獄に行きたくない。生死にかかわらず、どなたかと会って話をしたい。豪遊。食事。性行為。恨みを持った人物への復讐などの願いは叶えられませんので、あしからず。叶えられる願いの例としては、最後に一目、生存されているどなたかの姿や、景色を見たい。知り合いの方がお亡くなりになられたときのための伝言を残すなどです。ここまでではよろしいですか？」

「へっ？ …… あ、うん、なんとなく……」

急に問いかけられたため、麗子は戸惑ってしまった。

（なんか、マニュアルを聞かされているみたいで、全然頭に入らなかった……あの姿で性行為って……）

その部分だけはしっかりと聞いていたようだ。

「そうですか。では早速、立花 麗子さんの魂を査定しましょう」  
そう言うと、少年 命は、懐から、いつぞやの黒い手帳を取り出した。

表紙に、“金色の天秤”が描かれている。

「この天秤に手を置いて下さい」

命は、手帳を両手に持ち直し、天秤を上にして差し出した。

「査定つて、なんかやだなあ……」

麗子は不満を漏らしながらも、言われるままに手を伸ばし、その天秤に触れた。すると、その手の下から黄金色の光が放たれ、手の



甲の上に手帳に描かれているものと同じ天秤が現れた。

「おおつ、今流行りの3D……！？」

そんな冗談めいたことを言っている麗子の凹凸の乏しい胸元から、青い火の玉が現れた。自分の中からそんなものが出てきたことに驚いていると、それは、手の上の天秤に飛び、左右二つの秤を支える柱の、先端部にある燭台に青い火を灯した。

とたん、二つの秤に、白と黒、二色の火が灯った。白い方が若干大きく、秤をより深く沈ませ、天秤を一方に傾けた。

命はそれを見届けると、一度だけ頷いた。

「立花 麗子さん、お喜び下さい。魂は善に傾きました。よって、天国に進む許可が与えられました。これまで、善い人生を歩まれてきましたね」

命は満面の笑みを浮かべて言った。

「はぁ……」

(喜んでいいんだか悪いんだか……)

麗子は複雑だった。

「うーん、それにしても、善の傾きが浅いですね。変だなあ……もつと傾いてもおかしくないのに……なにか悪いことしませんでした？ 例えば、自分を殺そうとしたとか……」

命は不思議そうな顔をし、天秤の傾きを見つめていた。そうかと思えばチラリと視線を移し、麗子のことを見やった。

「！」

麗子はドキツとした。心臓は感じないが、それでもドキツとした。思わず左手を後ろに隠してしまう。そして、押し黙ってしまった。

「……まあ、いいでしょう。善に傾いたことに変わりはありませんからね」

命は、手帳を持つ両手を下げた。すると、天秤が消えた。彼が手帳を仕舞ったので、麗子も差し出していた手を戻す。左手はまだ隠したままである。

麗子の左手 左手首には当初、傷はなかった。昨日の、カミソ

りの傷である。けれど、彼女が思わず隠してしまったその瞬間から、なかったはずのところに傷が現れた。まるで刻み込まれたように現れたそれは、その後も消えずに残っている。

「この後は、なにか思い残すことがあり、それが叶えられるものであればご協力致します。それでご満足頂けるか、限られた時間が差し迫った場合、天国への道を開いて、地上から　この世界から旅立って頂きます。それでボクの仕事は終わりになります」

「お、思い残すこと……？　願いか……なにがいいかな……？」

麗子はまだ左手首のことで動揺している。平静を装い、さも考えていますと言わんばかりに腕組み、小首をかしげる。

「……あのう」

「ん、あつ、ちよつ、ちよつと待って！　すぐに考えるから！」

「あ、いえ、そうじゃなくて……その、実は、折り入ってご相談があるのですが……」

「相談……？」

「はい。それで、よかったらお時間を頂けませんか？」

「時間？　……うん、別にいいけど」

「本当ですか？　ああ、良かった！」

命は喜び、柏手かしわでを打った。パンツ、という音はしない。

「で、相談ってなに？」

「あ、ここではなんなので、場所を変えましょう。もっと落ち着いて話ができるところに」

そう言つと、命はまた鎌を手にした。その長い柄に跨り、浮かび上がる。まるで魔女がホウキで空を飛ぶようだ。

ちなみに、三日月を半分にしたような形の鋭利な刃は、真下を向いている。

「どうぞ、後ろに乗って下さい」

「あ、うん……」

麗子は言われるままに跨る。

（んー、なんか、いよいよファンタジーになってきたなあ……ちよ

つと前まではホラーやサスペンスっぽくてよかったのに……ファンタジーって苦手なのよねえ……)

心の中でぶつぶつと呟きながら、恐る恐る腰を下ろした。

麗子が乗っても、鎌はちゃんと浮かんでいる。

「では！」

命の掛け声に合わせて鎌が上昇を始めた。同時に前進も始める。

まさに魔女のホウキのように飛び立ち、屋上を離れて空へ。

事故のあった交差点が目下に見える。歩道の一角に赤黒い小さな点が見える。

麗子はそれをじつと見つめ、呟く。

「ああ、もう、夢でも見ている気分……夢なら早く覚めてほしい……」

麗子は切ない顔をした。

「そうですね……うん。夢みたいなものですよ、そう変わりません。夢だと思えば意外に楽ですよ。……ただ、覚めてはくれませんが……」

……」

麗子の呟きに答える命だが、その顔がふいに悲しみの色に染まっ

た。そうかと思えば、消え入るような声を漏らした。

「……？」

麗子はその声を聞き逃さなかった。後ろにいるので、命の表情は見えないが、その背中から、彼が悲しんでいる気がした。

(なにか事情があるのかねえ……ミコト、か……フツ、一瞬、ドキツとしちゃったなあ。まだ未練があるのかねえ……あ、未練で思っ出した。退職金、結局、一円も使えなかったじゃん……死ぬってわかっていたら驚沢したのに……まあ、両親にお金残せたからいいか……ゴメンね、先に死んじゃって……今まで、散々してきたけど、まあた親不孝なことしちゃった……ゴメン……ゴメンね……本当に、ゴメンねえ……)

麗子は顔をくしゃくしゃにした。泣いている。……けれど、その両の眼からは一滴たりとも涙が流れない。流れてはくれない……。

麗子はようやくやく自覚し、心底思い知った。  
自分は今もう、生きてはいないのだと。

(5) (後書き)

いかかでしたか？ 楽しんで頂けましたら、幸いです。

様々な方のご意見をうかがいたいので、評価や感想を頂けましたら助かります。あと、とっても嬉しいです。

「こちらです」

命は、目の前のガラス扉に手を差し伸べた。

「こちらって……」

麗子は傍らにいる。ガラス扉に向けていた視線を上げ、その上にある看板を見やった。そこには《ひとときの幸せ》とある。

「……なんで、ここ？」

馴染みの店を前にし、麗子は戸惑った。

「さあ、入りましょう」

命は歩を進めた。扉を目前にしても足を止めず、ノブに手をかけるなど、扉を開けるそぶりも一切見せず、ただただ直進する。ぶつかると思いきや、すり抜けてしまった。

「おお！ ……って、私はどうしたらいいの？ 私もすり抜けられないじゃないじゃんかっ！」

見事なすり抜けに感心する麗子だが、独り取り残されてしまったことに気づき、困惑。自分もすり抜けられるのかと思つて近づき、手を伸ばすも、音もなく当たるばかりですり抜けられない。正攻法としてノブを掴んで引つ張つてみたが、鍵でもかかっているのか、ビクともしない。しかし、店は営業しており、鍵はかかっている様子。それなのに何故開かず、何故すり抜けられないのかと、その場で右往左往。

「ちよつと！ ねえ、キミッ！」

扉を叩き、店内の命に呼びかける。しかし、音はせず、振り返りもしない。すると、彼ではない人物が扉に近づいてきた。マスターだ。

扉が開き、カランカラン、とベルが鳴った。

「マ、マスター……？」

扉が開くと知り、すかさず後ろに下がり、いつぞやのように当た

って弾き飛ばされまいと距離を取る。呼びかけるも、マスターは無反応で、無言。麗子の存在に気づいていないようで、素通り。扉の横の、店内の様子が見渡せる大きなガラスの前に立った。そして、持っていた雑巾で表面を磨き始めた。

「あ、今のうちに……」

扉が開いたままになっているのに気づいた麗子は、マスターを気にしつつ、扉をくぐる。そのとき、先に入っていた命は、すでに店の一番奥にいた。

麗子が客の目を気にしつつ、追いかけるように奥を目指すと、彼は、トイレに続く扉の横にある、《従業員専用》と書かれたプレートがついた扉に歩を進ませ、また、独り先にすり抜けてしまった。

「あっ、もう、またあゝ!?!」

従業員専用の扉の前まで来て、麗子はまた右往左往。念のため、もう一度試してみるが、やっぱりすり抜けられない。

扉を前にしてどうしたものかと悩んでいると、ベルの音がした。マスターが店内に戻り、扉を閉めたのだ。彼は真っ直ぐ、麗子のいる奥を目指した。

ぶつかると弾き飛ばされる。麗子は壁に身体を密着させてなんとかやり過ごそうとする。まもなくやってきたマスターは、彼女の前を通り過ぎ、従業員専用の扉を開けて入っていった。当たらなかつたことにホッとしつつ、彼の姿を追うように扉の奥を見る。

そこには部屋があった。

内装は店内と変わらず、テーブルとイスがあるだけの簡素な部屋だ。従業員専用と書かれていた割にそれ以外の物がなく、そこはまるで個室。

先に部屋に入った命は、すでに席に着いていた。

「こんなところ、あつたんだ……」

初めて見たところをめずらしがりながら、麗子も入る。

「さあ、どうぞ。座って下さい」

命が手招きした。それに気づいて視線を向けると、彼は向かいの

席に手を差し伸べた。麗子は言われるままに歩み寄る。

部屋の中央に置かれている一台のテーブル。椅子は二席ある。

麗子はもうひとつの椅子に座るべく、背もたれを掴んで引こうとするが、出入り口の扉のようにビクともしない。それで気づいたが、椅子はテーブルから少し離れた状態で置かれてあって、一人が座れるほどの間隔があった。

麗子は正解を見つけたと言わんばかりの顔をし、その隙間に身体を滑り込ませて見事に座った。

すると、なにかを待つように扉の横に佇んでいたマスターが動いた。開けたままにしてあった扉をぐり抜けて、早々に部屋を後にした。その際にはちゃんと扉を閉めた。

麗子は不思議そうな顔をし、扉を見つめた。

「えー、では早速、話に入らせて頂きますね。 単刀直入に申し

ますと、スカウトです。死神としてのスカウト。立花 麗子さん、死神として働いてみたいとは思いませんか？」

姿勢正しく、ちょこんと座っていた命。ペこりとお辞儀をしたかと思えば、なんの前置きもなしにそのように発言し、可愛らしく小首をかしげてみせた。

「えっ、ええっ！？ いや、ちょっと待ってよ！ いきなり過ぎるって！ 色々あって、わけわかんないからっ！」

話があまりに急過ぎて、当然のことながら困惑してしまっ。

「死神のスカウト……！？ いや、その前に、どうしてここなの！？  
ってか、壁！ キミみたいに通れなかったんだけどっ！？」

気になることが多過ぎる。

「あー、アハハ、見るからに混乱してますね。まあまあ、落ち着いて。とりあえず、話を先に進めましょうよ。色々疑問はあると思いますが、追々、ちゃんとご説明しますから」

命は笑うばかりで答えてはくれなかった。どうして今は教えてくれないのかと、麗子は納得できず、不満と戸惑いを抱かずにもいられない。しかし、彼は構わず話を進める。



「では、あらためまして。 お話は、立花 麗子さん、あなたを、死神としてスカウトしたい、ということなんです。死神とは、その名のとおり、死の神です。人に限らず、今、僕たちがいるこの世界、地上に生きる様々な生物の死を管理しています。とはいえ、ボクたち、人である死神がお世話をするのは、もっぱら人ですけどね」

「え……じゃあ、キミも人なの？」

「もちろん。ボクだってこのとおり、人ですよ。見えませんか？」

「……見えなくてもいい……」

「また曖昧なお答えですね」

命は苦笑した。

「じゃあ、キミもスカウトで……？」

「いえ。ボクるときはまだスカウトは行ってなかったんで、進んできたというか、させられたというか……まあ、そんなところですよ」

「つまり、強制ってこと……？」

「ハッキリ言ってしまうえば、そうですね。とはいえ、嫌々だったわけではありませんよ。それに、やめようと思えばいつでもやめられましたし。 あ、話がちょっとズレちゃいましたので、本題に戻

しますね。 ボクたち死神は、亡くなられた方々 死者の方々

の死後のお世話をするにあたり、その方が死神になれる条件に見合っ

ていれば、こうして積極的にスカウトのお話を持ちかけています」

「死神にならないかって？」

「はい」

「じゃあ、私はその条件に見合ってるわけ？」

「当然、そうなります。ちなみに、その条件ですが、第一に、天秤が善に傾いた方であること。稀に特例として、悪に傾いた方が選ばれることもあります。次に年齢です。10歳以上でなければいけません。年齢に関しても特例はあります。続いて性別ですが、これは問いません。なので、ニューハーフの方でも大丈夫ですよ。あ、今はオネエと言うのが流行りですかね？」

「いや、どっちでもいいから」

「すみません。えー、その次は、精神的にまともで、人間性に問題ない方であることです。後、これが一番重要なのですが、死というものがある程度理解し、重んじられる方でなければいけません。なので、死を軽視する方や、殺人、自殺など、自己の都合などで故意に他人に死を与えた方や、自ら死を選ばれたような方は死神にはなれません。まあ、当然ですけどね」

「……」  
命が最後の条件を明かすと、麗子は片目をピクリとさせた。そのとき、テーブルの下の見えないところでは、左手首の傷を覆うように握り締めていた。

「これらの条件ですが、その理由は言わなくてもおわかりだと思います。ですが、一応、させて頂きますね。決まりではないんですが、誤解のないようにしておきたいので。」

まず、善でなければいけないという条件ですが、天秤が悪に傾いた方は地獄に落ちなければいけないので、そんな方を採用するわけにはいきませんから、当然の話です。稀に特例があると言いましたが、それは例えば、若い頃は悪に手を染めてきたけど、心から反省し、晩年は出家したり、ボランティアなどに身を捧げるなど、他人に尽くす人生を送ってきた方がお亡くなりになって、善が着々と実りつつも、わずかに足らずに悪に傾いてしまった場合などです。情けではありませんが、地獄へ落とすのではなく、死後も死神として尽くさせるという選択肢がある。という場合です。本当に稀ですが、前例があります。

死神は死を扱う仕事ですから、死に対して責任感を持っていないような方には務まりません。なので、人道的に問題のある方は採用できません。精神的に弱い方や、不安定な方、人間性に問題のある方も一様にダメです。死を軽視することは決して許されません。

性別を問わないのは当たり前なので省きます。年齢に制限があるのは、自我や人間性が確立しており、死を理解できていなければいけないからです。ようするに、物心がついているかどうかです。自

我が有つて無いような赤ん坊には任せられませんからね。ちなみにですが、自我がすっかりしており、死というものをある程度理解できていれば、10歳未満であっても採用されることはあります。例えばボクとか。ボクが死神になったのは9歳のときでした」

「ふーん。じゃあ、その姿は9歳なんだ？」

「はい」

「……ちなみに、精神年齢はいくつなわけ？」

「そうですねえ、ざっと千は超えています」

「見た目は子供だけど、中身はお爺ちゃんなのね」

「失礼ですね……」

命はムツとした。一方の麗子は意地悪な笑みを浮かべた。

「話を続けますね。最後の条件ですが」

そのとき、扉が開いて、マスターが入ってきた。すぐに扉を閉め、テーブルに歩み寄る。彼の手にはトレイがあり、その上には茶碗とコーヒーカップが乗っている。

まず、茶碗を命の前に置き、次にコーヒーカップを麗子の前に置いた。

茶碗には抹茶が。コーヒーカップには文字どおり、コーヒーが入っている。

「え？ えっ？」

麗子は、目の前に置かれたコーヒーと、傍らに立っているマスターの顔を交互に見やる。すると、彼がサングラスを外した。

サングラスの下から赤い瞳が現れた。命と似ているが、マスターのは若干色が淡い。

マスターは、その瞳で麗子のことをじっと見つめたかと思えば、優しく微笑んだ。

「私の姿が見えるの……？」

赤い瞳に戸惑う麗子。それ以上に、自分の姿が見えていることに戸惑い、そして驚いた。まだ半信半疑で、自分の顔を指差してたずねてみる。すると、マスターは、笑顔のままに一度だけ頷いた。

「どっ、どっいうこと!？」

見えていると確信した麗子は、マスターではなく、命に向かってたずねた。彼はそのとき、茶碗を手にし、口元に運んでいた。

「ハア、やっぱり美味しい。さすがですね」

命は満足げな顔をし、マスターに向かつて親指を立てた。すると、彼も親指を立てた。その手を麗子にも向けると、サングラスをかけ直し、そのまま部屋を出て行った。

「え、ちよっと、マスター！」

呼びかけも虚しく、扉は閉ざされた。

「寡黙な方ですが、実はお茶目なんですよね。　　ズスウッ」

そう言つと、また抹茶を啜った。麗子は、その声と音に気づいたように振り返る。

今の麗子の表情だが、まるで、ミステリーもののドラマに出てくるような　ラストにさしかかり、さあこれから、謎を解明しようというときの、なにも知らずに困惑している脇役のような表情をしていた。

命は茶碗を置いた。

「こちらのマスターさんは、いわゆる、見える方なんですよ。ボクたち、死神の姿までも見えてしまうんだから、すごいですよねえ」  
閉ざされている扉に向けて手を差し伸べる。

「見える……? それって、あれ? 霊能力者ってこと？」

「はい。ようはあれですね。とはいえ、お被いしたり、成仏させたりする力ではなくて、幽霊と呼ばれる類のものや、ボクたちのような神に類似するものなど、通常、人には見えないものが見える目を持っていらっしやいます。千里眼とか心眼と呼ばれる類のものです。後、そういったものに触ることができ、その身に宿る、いわゆる霊的エネルギーを他人に分け与えることもできますから、こうして、肉体を持たないボクたちでも持つことができ、飲んで、味までわかっってしまう。類稀なる力の持ち主ですよ」

命は、手元にある茶碗をあらためて持ち上げて、実際に飲んでみ

せた。

早速、麗子も試してみる。

「うわっ、ほんとだ！ あ、熱い……！ 匂いもわかる！ 美味しい！」

麗子は一々反応し、よい表情を見せる。

「いつもとおんなじ味だ……でも、なんか変な感じ……」

カップを触ると、その熱さや、表面のなめらかさ、硬さが感じられるのに、テーブルに触っても、触っている感触がないため、妙な違和感を覚える。

「皆さん、そうおっしやいますね」

麗子の反応を眺め、命は楽しんでいる。

「マスターにそんな力があつたなんて……不思議な人だと思っではいたけど……」

麗子はあらためて、閉ざされた扉を見やった。

「幽霊はともかく、ボクたち死神まで見える方は稀で、しかも、普通に話ができますし、触れたり、こうしてお茶を飲んだりもできるので、せつかくですから親しくさせて頂いています。お店を利用させて頂いたり、霊障などで困っている場合にはご相談に乗ったり」「死神と親しくって……」

麗子は呆れた顔をしつつ、コーヒークップに手を伸ばした。

「フフツ。ところで、そろそろ話を再開しても構いませんか？」

「え？ あっ、うん。どうぞ」

麗子は急いで一口を啜り、ソーサーに戻した。

「それですね、えーっと……あれ、どこまで話しましたっけ？」

命は眉をしかめ、小首をかしげた。

「えーっと……あ、キミが実はすごいお爺ちゃんってところじゃない？」

麗子も同じ向きに小首をかしげる。

「……ボクは、9歳のときに死んで、死神になりました。ですから、実年齢も精神年齢も9歳っ！ ……です。で、最後の条件ですが」

命は9歳のところを強調した。

「あ、流された……しかも、精神年齢まで9歳って……」

麗子はそう心の中で呟きつつ、苦笑した。

「……ああ、そうでした、自殺の件くだりでしたね……」

話の再開どころを思い出した命だが、その表情がふいに曇った。

（ん……？）

麗子はそれに気づき、注目する。

「えー、自殺された方がダメだと言うのは、言わずもがなです。自殺というのは、生命いのちを授かった身として、もつとも犯してはならない罪です。最大の罪です。自らの命を捨てたような方を、死をつかさどる神である死神にするわけにはいきません。……ボクとしては、自殺された方は一人残らず、強制してでも死神にし、その罪を心の底から悔いるまで、半永久的に他人の死を見送らなければいけないようにすべきだと思えますがね……」

命の口調が今までと違う。

（あれ……怒ってる？ お爺ちゃんのところかな……？ それとも、自殺……？）

自殺という言葉を思い浮かべた麗子は、無意識に左手首に手を伸ばした。

「ご存知ですか？ 子孫繁栄のための一手段や、犠牲、生物としての本能以外で自殺することができるのは、人間だけなんですよ……どなたかがおっしゃってましたけど、自殺は人間にのみ許されたことで、それは人間の特権であると……馬鹿げていますよ！ そんなものは、自殺を正当化するためのだけの言葉に過ぎません！」

命は語気を強め始めた。

「人間は……人間という生き物は、進化の過程で“理性”を得ましたが、その代償として、生命体であることの根源の一部を失ってしまった。それはいわば、“退化”にも等しい。そんなことにも気づけず、地上の実質的な支配者として君臨していると思いがあってい

る人間は、どんな生き物にも劣る！ ……………と、神様はおつ  
しゃいます」

なんとも険しい表情で、雄弁にそう語った命だが、長い沈黙の後、  
ふいにパツと笑顔を浮かべた。彼の表情の変化や、徐々に重みを増  
してゆく言葉についてゆけず、終始無言を貫いていた麗子は、その  
急な笑顔に困惑した。

自殺について語り出したとき、命の目の色が変わった。実際に色  
が変化したわけではないが、凄みというのか、普段は表に出さない  
感情が込められていたように思えた。

つばらで、ルビーのように鮮やかなその瞳の奥に、底知れぬほど  
の根深い怒りが見受けられた。憎しみも感じた……気がした。命が  
笑顔を浮かべたとたん、それらは消失した。

本当に消えてしまったのか、再び心の奥底に仕舞い直されたのか  
はわかりようがない。

「以上が、死神になれる方の条件の説明です。立花 麗子さん、  
あなたはそういった条件をパスし、選ばれたわけですよ」

命は未だに笑顔を浮かべている。可愛らしい笑顔だが、どこか嘘  
くさい。作り物のような気がしてならず、麗子は疑念を抱かずにい  
られなかった。

「へ、へえ……でも、それぐらいの条件だったら、結構ざらにい  
るんじゃないの？」

麗子は今、左手首をギュッと握り締めている。本当だったら痛い  
ほどの力で。

「いやいや、それがそうでもないんですよ」  
命は顔の前で手を振った。

「そうなの？」  
命は頷いた。

「この日本だと、毎日、二千人から三千人ほどの方々がお亡くなり  
になるのですが、その善と悪の割合は悪が多くて、善は半数にも満  
たないんです。といつても、悪の方の亡くなる割合が、善の方と比

べて多いという話なんですけどね。ちなみになんですが、一日、少なくとも二千人以上の方がお亡くなりになっているわけなんです。単純計算すると、一年でおよそ、七十三万人の方が亡くなられていることになりました。日本の人口は現在、およそ一億三千万人ですから、ざつと百八十年で滅亡してしまふんですよ。大変ですよねえ」

作り物の笑顔が、次第に自然なものになってゆく。百八十年の件に近づくにつれてその笑顔が輝きを増し、「大変ですよねえ」の辺りになると、きしよくまんめん喜色満面に。

「か、可愛い顔して、なんてえげつないことを……」

対照的に、麗子の表情はどんどん曇る。

「とはいえ、一日の出生率はわずかに上回っていますから、滅亡することはありません」

「そうなんだ……」

「はい。それに、今の時代はずっとマシですよ。特にこの日本は、長らく戦争をしていません。否が応でも人を殺めなければいけない時代ではないですし、生きるため、悪事に手を染めなければいけない時代でもない。それに、切腹もありませんからね」

「ああ……」

麗子は大いに納得した。

「半数に達してはいませんが、近づいているのは確かです。そういう意味では、この日本という国は恵まれていると言ってもいいでしょうね」

「なるほど」

麗子は素直に感心している。

「……でもさあ、私なんか死神になっていいのかな？ どこにもいる三十路を目前にした女なんだけど」

麗子は自分を指差した。

「構いませんよ。というより、なって頂けるととてもありがたいです」

「なんで？」



「現在、この地上に存在している人口と、死神の数が合わないんです。かなり開きがある。人口は年々増え続けていますが、それとは対照的に、死神の数は減少傾向にあり、正直なところ、足りていないですよ……」

命はため息をこぼした。

「特に足りていないのは、この日本です。久しく戦争がないので、善の割合が高くなっていくと先ほどは言いましたが、それはつまり昔に比べて、死者の数も減っているわけです。その上、日本人の寿命が延びていることもその原因のひとつです。喜ばしいことなんです。その喜びにはそういった弊害も生じています……ちなみに、特に日本がと言いましたが、ならば他から持ってくればいいのでは？ と疑問に思われたかもしれませんが、言葉の問題、人間性、文化、宗教の違いなどを考慮すると、国によって管轄をわけざるべきであり、つまりは、日本人は日本人が世話をすべきだということですよ」

麗子は、なるほどと相槌を打った。

「今の日本人の考え方や傾向もあるのでしょうが、今の方々、いわゆる“現代人”は、死神になりたがらない方が多い。昔であれば、死神という存在を特別視してくれて、使命感から自ら率先してなってくれる方が多かったです。今の方々は、死んだ後まで働きたくないとか、他人に尽くしたくないとか、他人の死など見たくもないとか……」

「ああ、確かに……」

麗子は大いに納得した。

生前、仕事をしていたときも、新入社員など、自分よりも若い人間と接したとき、そういったギャップをひしひしと感じていた。彼女は今時とは呼べないタイプで、年相応ではなかったから、余計に感じていた。

「生活が豊かになり、寿命が延びたことで、長寿の方の場合、人生に満足してしまう方や、死後、これといって思い残すこともなく天

国に旅立たれてしまう方、天国でも地獄でも、どちらでもいいから早く行って、なにもかも忘れてしまいたいといったような方が多くて……若くして亡くなられた方は、他人や死んだ後の世界になんか興味がなく、死神になっても仕事をせず、生前に見られなかった世界を好き放題飛び回り、結果的にクビに……」

（あ、ダメなんだ、それ……）

麗子は、死神になれば世界を見て回れるかもしれないと、ちょっと期待していた。

「それに、死神は強制ではなく、あらかじめ決められた年数、仕事をしなければいけないとかの契約制や、義務制でもないの、本人が辞めたいといえれば辞めることができます。そのため、たいていの方が長続きしなくて……興味があつて死神になつてはみたけど、他人の死を見るのはやっぱり辛いとか、ただ働きは嫌だとか……」

「えっ、ただ働きなの？ あ、じゃあ、ボランティアあつてことだ」「はい、そうなんです。神の立場となつて働くわけですから、報酬を支払うわけにいかないんです。それに、ようは死人なので、給料は払えませんし、サービスで一日だけ生き返らせるとか、来世に優遇されるとか、そういうこともできません。つまり、飲まず、食わず、眠らず、疲れずで、ただひらすら他人の死の世話をしなければいけないわけなんです。嫌がるのも当然ですよえ……デメリツトばかりだ。メリツトといえば、自分の死後、家族や世界がどうなつてゆくのか、その行く末が知ることができるぐらいなんです。だから、皆、すぐに辞めてしまふんです……」

命は悲しい顔をした。

「なんだかなあ……この世もあの世も世知辛いよねえ……」

麗子は、自分の境遇もあり、余計に切なかつた。

「スケジュールが過密なんですよねえ……その上、新しい死神発掘のノルマまで課されていて、その結果、さらに辞める人が増えたりして……そろそろ、システムそのものを変えるべきだとは思つので

すが、これが複雑なもので、この日本という国のように、なにかを変えようと思っても色々な障害が発生して……結局はなにも進展せず、刻一刻とただ時間ばかりが無駄に過ぎてしまっ……ですから、一人でも多く死神になって頂けると、とてもありがたいんですよ……」

命は上目遣いになり、捨てられた子犬のような眼差しで、麗子を見つめた。

（うっ……視線が痛い。生きているときには必要ないってクビを切られた私が、死んでから求められるなんて、なんて皮肉な……）

麗子は心底情けなくなり、大きなため息を吐いた。

「どうでしょうか？ 死神という仕事に興味ありませんか？ こんな話をした後におたずねするのもなんなんです……」

麗子は腕組み、目を閉じて、「ん〜」と唸りながら考える。

「……………興味はある！」

長い沈黙の後、一度だけ大きく頷いた。

「本当ですか!？」

命は身を乗り出した。

「うん。辞めたいときに辞められるんだよね？ だったら、試しに経験してみるのもありかとは思う。それに、突然リストラされて無職になるわ、大学時代からの恋人には浮気されてフラれるわ……やりにもよってあんな死に方するわでもう散々！ このままだと死んでも死にきれないわよ！ ……って、もう死んでるんだけどね」

自分で言っただけであらためて情けなくなり、頂垂れた。

「お試しても構いません！ 何事もまずは経験ですからね！ それに、向き不向きもありますし！」

「そう？ ……じゃあ、やってみようかなあ、死神」

「本当ですか!？ やったっ！」

命は大いに喜び、拍手を打った。無論、音はしない。

親にオモチャでも買ってもらった子供のように喜ぶその姿に、麗子は思わず微笑んでしまった。つい、可愛いと思ってしまった。

「無職だからね、ちょうどいい再就職だわ。それに、死神として第二の人生を送るっていうのも面白いじゃない。……それに……」

麗子はふと視線を下げ、テーブルの下にある左手首を見やった。

（それにこれは、命を粗末にしようとした私への罰みたいなもの……）

斜めに入っている小さな傷を、そつと指でなぞった。

「では、早速行きましょうか、冥府へ！」

命は素早く席を立った。座る前に外し、壁に立てかけてあった鎌を手にする。

「冥府？」

麗子が視線を上げたとき、命は、なにもないところに向かって鎌をサツと振るった。

赤い三日月が虚空を切り裂いた。すると、一筋の切れ目が走り、縦横に大きく広がって、この部屋とは異なる景色が見える大きな穴が現れた。

赤黒い荒野が見える。

「な、なに、これ……？」

麗子も席を立ち、その穴に近づいた。すると、鎌を背負った命に腕を掴まれた。

「この向こうは冥府に繋がっています。そこには、すべての死神を統治する神、冥府の王、ハデス様がいらっしゃいます。さあ、行きましょう！」

麗子の手を引き、その穴に向かって歩き出した。

「ハデス？ ハデスってまさか……！？ わ、ちよつ、ええっ!？」

麗子は、半ば強引に穴の中に引っ張り込まれた。

二人がぐぐり抜けると、その穴はまもなく閉じ、そして、音もなく、忽然と消え失せてしまった。

それからしばらくして、扉が開いた。

マスターがやってきて、テーブルに残されていた食器を片づけて

すぐに出てゆく。

扉を閉める際、マスターは囁くように呟いた。

「……がんばれ……」

(6) (後書き)

いかかでしたか？ 楽しんで頂けましたら、幸いです。

様々な方のご意見をうかがいたいので、評価や感想を頂けましたら助かります。あと、とっても嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2686z/>

---

LIFE AFTER DEATH ~死後の人生~

2011年12月11日16時49分発行